
ゲームの世界で第二の人生！？

シェイフォン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゲームの世界で第二の人生！？

【Nコード】

N4709W

【作者名】

シェイフォン

【あらすじ】

目が覚めると俺はゲームに良く似た世界にいた。

それだけなら別に構わないが、薄汚い路地裏で寝転んでいた浮浪児からスタートだなんてどんな上級者プレイだ？

まあ、良いだろう。

おれはこのゲームをかなりやり込んでいるからこの程度で心が折れることはない。

さてと、ログアウト出来ないのは放っておいてまずは生活できるほどの環境ぐらいは整えるか。

人物紹介（前書き）

これからどんどん加筆していく予定です。

書き込む順は私の気まぐれですが、主要キャラは全員書き込むので
ご安心を。

ネタバレを含みますのでご注意ください。

人物紹介

ユウキ「カザクラ

本編の主人公。

突然訳も分からずゲームとそっくりな世界に飛ばされたにもかかわらず慌てなかった。

これは本人は夢だと考えていることが起因している。

そのため己の行動に対する責任というのが曖昧で、キツカ達浮浪児と同居するなど常識では考えられない行動を取る。

技術や調合がチートであり、材料さえ揃えば作り出せないものはない。

エルファ「ララフル

主人公のメイド

鮮やかな緑色の髪と白磁の肌、そして顔のほりが深いので人形のよ
うな印象を与える。

主人公に対しては結構厳しく、辛辣な言動を行うことが多々ある。

サラ「キュリアス

主人公を師匠と呼ぶ鍛冶屋の娘。

主人公が作成した武器に感銘を受けて自ら弟子入りを願った少女。

くすんだレンガ色の髪や同年代と比べてやや長身で筋肉質なことから年上だと見られる場合が多い。

天才型の人間で、鍛冶に関しての才能は底知れないが、それ以外になると全く駄目である。

キツカ

主人公が拾った浮浪児その1。

活発な性格でそのエネルギーを表し、髪も瞳も燃える様に赤いのが

特徴。

気安い性格をしており、誰にでもフランクに接することが出来るので人気者である。

主人公に拾われる前は4人組のリーダーとしてスラムを生き抜いていた。

冒険者を志望しており、将来は前人未到の地を踏破することが目標。アイラ達を仲間と表現するなら主人公を親と考えている。

アイラ

主人公が拾った浮浪児その2。

キツカとは正反対の冷静沈着な性格をしているが、思い込みが激しいのでたまに暴発する。

青い髪と切れ目が特徴で、周りに油断ならない人物という印象を与えている。

諜報や謀略の類を好み、合理性を追求するので容姿にはそんなに拘らず、髪も短く切り揃えている。

主人公に拾われる前は、4人組の頭脳として活躍していた。

主人公を主として捉え、絶対の忠誠を一方的に誓っている。

ユキ

主人公が拾った浮浪児その3

無口な少女で何を考えているのか本人以外誰にも分らない。

浮浪児なので何の教育を受けていないにも関わらず王国最高峰の魔法学校に入学出来た。

ある意味主人公以上のチート能力保持者。

クロス

主人公が拾った浮浪児その4

大柄な体格と優しい性根の持ち主。

その体力はどう学年でも飛びぬけており、一人だけ成人年齢が受け

る訓練をこなすことが出来る。

主人公はクロスを成人だと疑っているが、キツ力達は主人公や自分達と同じ年齢だと言い張っている。

攻撃よりも防御に関心があったので主人公はクロスにファイアーエムブレムに登場するアーマーマーナイトに近い鎧を装着させた。

無一文から始まる（前書き）

始めまして、シェイフオンです。

経験を積んだ主人公というチートな能力を使って襲いかかる不合理から必死に抗おうとします。

剣術から裁縫まで全てMAXレベルにまで上げた経験のある主人公がどのようなセカンドライフを歩むのか。
それを楽しんでいただければ幸いです。

無一文から始まる

気が付くと俺は子供になって薄汚い路地で倒れていた。
いや、冗談じゃないよ？

一応自己紹介しておこう

俺の名は火桜優喜。フルダイブ型MMORPGにどっぷりハマった高校二年生だ。

一応学校は通っている。ゲームが大好きだが平均点はクリアしている。

本音を言えば学校を辞めてずっとゲームをしたいのだが、それをやると確実に家を追い出される。

比喻じゃない、マジ話だ。

何せ内の親はやると言えば必ずやるタイプ。

どれだけ理不尽な約束でも絶対に履行するのだ。

……ヘタレと嘲っても構わない。

俺も自覚しているから。

閑話休題

俺の時代にはフルダイブ出来る機械がある。

ん？ それは何だっけか？

それはヘルメット状の形をしたもので、脳からの電気信号を受け取り、そして逆に変換した信号を流すことによってあたかも現実に存在しているよう錯覚させる機械だ。

洗脳されそうで怖いと感じるだろうが、正直俺達にはこれが無いとまともに授業についていくことが出来ない。

何せ高校二年の授業で不確定性原理を応用した問題を出されるんだぜ。

教科書だけで解けるか。

機械に頼らないと出来るわけがない。

そして俺は文系だ。ついでに言えば理系はもつと恐ろしいぞ。

数字の羅列を見ただけで何を意味しているのか理解できるんだ。

スパイ養成課か、と思ったよ。

まあ、その機械のおかげで俺達は限りなく全能に近づいているがな。

普通の俺でさえ過去の名医と同程度の執刀が出来る。

また話が逸れた、すまん。

とにかく、俺はそのフルダイブ機械を使ってMMORPGをやっていたわけだ。

まあ、やっていることと言えば、パーティを組んで魔物を討伐するのではなく、ひたすらにアイテムを作ってそれを売り捌いていたわけだけだな。

ダンジョンにはレア素材を探すために潜る程度だったし。

そのゲームはユーカリア大陸物語。

各プレイヤーは望みの職業になって冒険者になったり国を興したりと色々と自由度の高いゲームだ。

ここからが本題だ。

俺はいつもの通り学校へ行き、いつもの通り帰宅していつもの通りゲームを起動させた。

普通なら俺は拠点としている工業都市ジグサルから始まるはずだった。俺は大富豪で、その都市に対して影響力がある。顔もイケメンで背の高いハンサムなキャラクターだったはずなのに、俺は気が付くとどこか訳の分からない街の裏側で倒れていた。

さあ、どういうことだ？

眼が覚めた俺はまず始めにウィンドウを開いて見た。

ウィンドウに表示されるのは名前とステータス、持ち物や装備の他にゲームを終わらせるログアウトがあるはずなのだが。

「……ない」

その欄は空白になっており、目をこすっても変化が無かった。どうやら不意なバグが起こったのだと考える。

「仕方ない、しばらくここで生きるか」

喚いたり叫んだりしても意味は無い。それならば一度初心に帰ったつもりで始めからプレイしてみようと決めた。

「まずは何を持っているのか」

俺はもう一度ウィンドウを呼び出して己の状態を確認する。

名前： ユウキ・カザクラ

装備： 武器 なし

防具 ボロの服

頭 なし

足 擦り切れた靴

装飾品 なし

持ち物： なし

お金 0G

ステータス なし

「……何だこれは？」

その惨状を見て愕然とする。

良いところが一つも無い。普通ならお金も3000Gぐらいはあり、ステータスも幾らかは自由に設定できるはずだ。

ステータスというのはスキルの別称で、例えば剣を振るうとステータスに『剣』という項目とレベルが追加され、そのレベルが上がることにSTRやDEFなどが上昇する。

ちなみに『短剣』のスキルが上がると『剣』と比べてSTRよりもAGEが上昇する。

そして、スキルが1から2に上がると能力の上昇は2または3程度だが、スキルが20代だと能力の上昇率は2桁まで上がる。ゆえに満遍なくスキルを伸ばすよりのと、一つのスキルを伸ばすのではあまり大差ない。

閑話休題

これだとボーナスポイントを使わず、さらに所持金を全てどぶに捨てた状態だ。

そして、それ以上に驚いたのは。

「この容姿は何なんだよ」

見た感じ五年前の俺である。年齢は12歳前後と言ったところか。

「まあ、上級者の俺にはちょうど良いかな」

初心者なら間違はなく匙を投じているが、生憎と俺はこのゲームをやり込んでいるマニア。だからこれくらいのハンデなど物の数ではない。

「とりあえず最初の目標は一軒家を持つことだな」

家さえ持つことが出来れば行動範囲がグッと広まる。薬を大量に調合出来たり鍛冶が出来たりとメリットは計り知れない……まあ、月々に税を納めなければならぬ欠点があるがそれは仕方ないだろう。

「さてと、じゃあ始めますか」

俺はそう呟いた。

しかし、俺はこの時、これから先に起こることなど想像すらできなかった。

手頃な空き地に移動した俺は簡易な調合台を作成する。

「まずはポーションの調合から」

ポーションとはHPを回復する薬の中で最も安価で親しみやすい類のだ。値段は一個50Gと安いが、材料となる草はそこら辺に生えているので原価はほぼ0。まさに初期に作る物としては打ってつけだ。

「そういえば序盤の頃もこうしてポーションを調合していたよな」
何世代前のゲームとは違って材料を揃えてボタンを押せば完成という代物ではない。そして、このユーカーリア大陸物語というゲームはフルダイブ機能を駆使してリアルを極限にまで追求した結果、現実と同じように調合の匙加減で成否が分かれるのだ。

まさしくリアル志向。

現実と何一つ変わらない。

ゲーム製作者に殺意を覚えるほどリアルだ。

「確かポーションの調合法は……」

俺は頭の中からポーションの調合法について引つ張り出す。

ああそうだ、確かああいう作り方だった気がする。

捨ててあった竈と槓を拾ってお湯を炊く。

沸騰するまでの間に材料の草をすり潰しておこう。

「……子供だから力がない」

普段ならシャシャシャとやってしまう作業が渾身の力を込めて行わなければならなくなっている。だからいつもの倍の時間と労力を費やしてしまった。

「さてと、次はこれらの材料を手順通りに放り込んで混ぜると」

まずアカイ口草をすり潰したのを加えて混ぜ、色が淡くなってきたらアオイ口草を加える。ここから激しくかき混ぜて完全な薄紫にした後キイ口草を加えて今度はゆっくり混ぜて完成。

「まあ、上出来かな」

ポーションを調合しているうちに体が思い出してきた。俺の経験から言うとこれは良い部類に入るだろう。

確認のため出来たポーションを少し飲んでみる。いつも俺が作っている上質なポーションと比べれば劣るものの、市販品よりかは味も効果も高いと判断。

「さすがは俺、弘法筆を選ばずとはよく言ったものだ」
うん、満足。

そして俺はそのポーションを持って薬売りの店に行く。ここは様々な種類の薬を取り扱っており、その中にポーションが含まれている。そして俺はその店の番人をしているお姉さんに声を掛けた。

「こんにちは、おねいちゃん」

ニツコリと、キッズスマイル全開で話しかける俺……気持ち悪い。
「あら、ボク。どうしたの？ お使い？」

まあ、そうだろうな。俺もお姉さんの立場ならそう判断するだろう。しかし、俺はお使いでは無い、営業をしに来たのだ。

「おねいちゃん、このポーションをどう思う？」

そう言ってガラス瓶に入ったポーションを見せる俺。

「あら、それは……」

お姉さんの瞳に真剣見が宿る。やはりそこはプロなのだなあと実感した。

光に透かしたり、振ってみたり味を確かめた後にお姉さんはホウツと感嘆の吐息を洩らす。

「ボク、これは凄いわよ。少なくともこの街にいる調合師じゃあ一個一個丹念に作ってもこのレベルは作れない。一体どこの調合師が作ったの？」

そう聞いたので俺はにこやかに自分を指差す。

「え？ ボクが作ったの？」

「うん、そうだよ。なら目の前で実演してあげようか」

お姉さんが頷いたのを見た俺は予め用意してあった原料を取り出

す。

「それってそこら辺に生えている雑草じゃないの。もっと質の良い草を使用しないと飲めたものじゃないわよ」

忠告してくれるは有り難かったけど、俺は首を振った。

薬売りの店の奥には調合台が備え付けている。やはりこのお姉さんも調合師の端くれなのだろう。

「じゃあ、作るからよく見ておいてね」

そう宣言して俺はポーションを作り始めた。

昨日と手順は似ているが微妙に違う。今回はアカイ口草と一緒にアオイ口草を加えたり、薄紫からさらに透明になり始めた所でキイ口草を追加したりしていた。

お姉さんの言う通りに、これらの草は生えているのよりも栽培した方が手順の変更がなくて楽だが、その分お金がかかる。

と、言っても一草3、4Gなのだが、それでも今の俺にその出費はきつかった。

どうせ俺はこれ以上の難易度を誇るエリクサーを何度も調合しているし。

あれはきつかった。ほんの少しでも力加減を間違えると失敗。しかも嫌らしいのが、エリクサーは失敗した時点には現れず、完成してからその失敗に気付く点だ。

あれで何人ものプレイヤーがエリクサーの調合を諦めたか。

「はい、完成したよ」

そう昔の思い出に想いを馳せている内にポーションが完成したようだ。それをコップですくってお姉さんの前へ持っていく。

お姉さんは目をまじまじと見開いた後、それを口に含んだ。

「素晴らしいわ」

しばらく咀嚼した後にそう吐息を洩らすお姉さん。

「これはすごいわ。私の人生の中でもこれほどのポーションにお目

にかかったことはない、これなら50Gと言わず、100Gでも売れるわ」

早口に捲し立てるお姉さん。それを見た俺は手応えを感じて切り出した。

「ねえ、おねいちゃん。提案だけど、このポーションをここで売ってみたい？」

博打よりも安定的に収入を得られるのを優先する。確かに露天商は利益が相当出る代わりに、ならず者による強奪が考えられるし、また売り上げ代をいくらか取られる可能性がある。今の時点で闇の者と関わるのは避けた方が良く、今後の活動に大きな支障が出る。

「ええ、いいわ。むしろこちらからお願いしたいくらい。ところでボクの名前はなんていうの？」

「ユウキ」カザクラだよ。おねいちゃんの名前は？」

「私の名はティータ」エルマライよ。これからよろしくね」

交渉の結果、俺はポーション一つにつき30Gの利益が出るようになった。もちろん、この俺の正体を隠すというのが条件付きで「とりあえず今日宿に泊まる分のGは確保できてよかった」

ポーション二個で60G。今回はおまけとして200G余分にくれた。

よし、これなら今日は宿に泊まれるな。

俺は人知れず安堵した。

今日の収穫

収入元を確保できた。

無一文から始まる（後書き）

フルダイブ機能という設定について説明不足でしたので修正しました。

11/4設定を変更しました。

俺は仲間を得た

合計して260G。100万G以上持っていた俺にはこの金額が物足りなく感じるがまあ良いだろう。

何せ全くの無一文からこれだけのGを得たんだ。

さらにこれからポーションを売ることによって安定的な収入を得ることが出来る。

「いやいや、お金のありがたさを感じるねえ」

俺は十二歳の少年とは思えないセリフを吐いた。

クルルルル

「お？」

宿屋に向かっていると突然俺の腹から鳴った。

「ん？ ユーカリア大陸物語に腹が減るなんてことはあったっけ？」
酒場などで食べ物を食べることはあるが、必ず食う必要はなかったはずだ。

ぐーっ

「……とりあえずは腹ごしらえだな」

腹の虫には勝てない。

俺は腹が減る、減らないについての考察は後回しにして近くのパン屋へ向かった。

「毎度ありがとうございます。お釣りは五（S）シルバーと二（B）ブロンズです」

適当なパンを見つくりつつ俺は代金を払った。

そして手元に残る銀の硬貨と銅の硬貨。

この世界の通貨は1Gで10S。そして1Sで10Bとなっている。

まあ、食料品や安物の素材の単価に付けられるSやBなんて使う

ことは最近だと滅多にないから忘れていた。

何せ俺がGを使うと言えば何千G単位だから。

「さてと、食べるか」

俺は近くのベンチに腰を下ろし、ついでに買った飲み物もすぐ横に行く。

出来立てらしくパンはまだ熱い。

ふわふわとしている。

「さてと、いただきまー……」

俺が大口を開けてかぶりつこうとした瞬間目の前の少女と目があった。

「……」

少女は何も言わないが、目はしっかりと訴えている。パンをくれと。

年代は俺と同じぐらいだろう。

服装は俺と同じボロの服を着て金色の髪はばさばさ、顔も薄汚れている。

元は良いのに台無しだと感じる。

見た感じ小動物という印象を受けた。

「……すい」

試しにパンを右から左へ移動させると少女の目もそれに続く。グルグルと回転させたら同じように少女の目も回転した。

「きゅー」

どうやらやりすぎて目を回してしまったらしい。

俺は調子に乗ってしまったと反省した。

「悪かった。ほら、これをやるよ」

お詫びに俺は手に持ったパンを差し出す。幸いにもまだ口を付けていないからセーフなはずだ。

「……くれるの？」

途端に少女の目が輝き出す。

本当に素直だなと感心しながら俺は頷いた。

「……ありがとう」

「つて、おい!？」

少女は差し出したパンでなく、俺の隣にあったパンの袋を掴んで一目散に駆け出して行く。

「ちよつと待て! ドロボー!」

俺は叫ぶがもう遅い。すでに少女の姿は見えなくなっていた。

「はあ、相手がNPCとは言え腹が立つな」

俺は毒づきながらもまたパン屋に赴き、同じパンを注文した。

店員に不思議がられたが、俺が少年口調で事情を説明するとパン屋の店員はクスクス笑い始めた……値段を安くするとかちよつとはサービスしてくれよ。

そして俺はまた同じベンチに座った。

キョロキョロと周りを見渡し、また同じアクシデントが起きないか確認する。

前方良し、左右良しそして前方良し。

俺はパンを手を持った。

そして食べようとしたその時。

「本当に申し訳ありません!」

後方から突然大きな声で謝罪させられて俺は引っくり返ってしまった。

俺の目の前には四人の少年少女がいる。女子三、男子一の比だ。

しかもその女子の内の一人は俺からパンの袋を奪っていった無口女だった。

「ほら、謝りなさい!」

「……ん」

そのリーダーらしき女の子に小突かれて先程の無口女が頭を下げる。

リーダーらしき女の子は凜としていて口調もはきはきとしている。薄汚れているが、髪を洗えば燃えるような赤毛を見せるだろうと想像した。

俺は手を振りながら。

「いや、もう良いよ」

と、答えた。

「盗みを働き、本当に申し訳ありません。ユキは本当に良い子なんです、感情表現が下手ですけどそれは生まれつきなんです」

無口少女はユキという名前なのか。

「申し遅れました。私はキツカ、後ろにいる切れ目がアイラそしてなよなよしている奴がクロスです」

「よろしく願います」

「よ、よろしく」

同時に頭を下げるアイラとクロス。アイラの方は髪が藍色であることも相まって冷たく、鋭く切れるような印象を与えそしてクロスの方は俺と同じ黒い髪と瞳から真面目で実直なイメージがある。

「何度も言ったように僕はもう怒っていないから。だからもう消えてもいいよ」

何度も言っているのだが四人組の少年少女はこの場から去ろうとしない。そして謝り続けている。

「……ああ、そういうことか」

再三言っても謝り続けるのを見て俺は得心した。

彼らは単に謝罪しに来たのではない。それ以上のものをせびりに来たのだ。

「これで良いか？」

俺は観念して財布から一〇G硬貨を取り出してキツカという少女に渡す。

「き、金貨だ」

「……きれー」

クロスとユキが一〇Gの光具合を見て感嘆のため息を漏らす。

「ねえ、ここでやめちゃう？」

「そうですね……」

そしてキツカも動揺して後ろのアイラに相談を始める。

「やれやれ、いい勉強になったな」

俺はため息を吐いてその場を後にしようとした。これ以上関わっても仕方ない。

「お待ち下さい」

が、少女に似つかわしくない氷の様な冷たい声音が俺を引き止める。

「ええと、確かアイラだっけ？」

俺が振り向いて尋ねるとアイラはコクリと頷いた。

「僕はもう話すことはないのだけど」

俺は声音を低くして問う。これで俺が苛立っていることが相手に伝わるだろう。

「あ、アイラ、もう止めようよ」

「アイラさん、ストップストップ」

「……怖い」

事実、後ろの三人も怯えているようだ。

しかし、アイラは意にも介さず言葉を紡ぎ始めた。

「私達を買ってくれませんか？」

「は？」

突然の申し出に俺は呆氣に取られる。

「アイラ！？ 何を言ってるの？」

「そ、そうですね。いきなり何を」

「……おー」

後ろが困惑しているのが伝わってくる。

「あなたは私達と同じ浮浪児の格好をしていますますが中身は全く違う、一人で自立できる能力と自信を持っています。あなたは必ず瞬く間にこの最底辺から抜け出すでしょう」

「ほう……」

俺は感嘆のため息を漏らす。

アイラの言う通り俺は違う。薬の調合も出来るし鑑定の目聞きも出来る。さらに鍛冶も出来るため、あつという間に駆け上がるだろう……チートだし。

「NPCにしては洒落た誘い文句だな」

「NPC？」

アイラが首を傾げるが俺は気にしない。

「まあ、面白そうだから仲間にしてみるか」

どうせこのデータはバグであり、エラーから復旧すれば消えてしまふ運命にある世界。

それなら付き合ってやろう。

俺は彼らをもう一度まじまじと見つめる。

「どうですか？」

目の前のアイラは間違いなく抜け目がないだろう。ユキがパンを持ってきたところからここまで持ってくるのは並大抵のことではない。

キツカは決断力というか思い切りが良い。俺に声を掛ける時もそうだが、彼女は竹を割った様な潔さがある。

クロスは大柄な体格だから力もあるだろう。これなら暴漢に襲われても大丈夫かもしれない。

ユキは確実に何かを持っている。ユキがいなければ俺達は会えることすらなかっただろう。

「よし、ついてこい」

「え？ つまり受け入れてくれるのですか」

確認するようにアイラが尋ねると俺は苦笑しながら。

「その通り、だから俺について来てくれ」

俺は仲間を得た（後書き）

2011年9月13日に一部改編しました。

紺屋の白袴

「どこへ行くのですか？」

「まあ、ついてくれば分かる」

俺は疑問を口にするアイラにそっけなく答える。

「急に乱暴になりましたね」

「否定はしないな」

猫を被るのは疲れるんだよ。

確かここら辺りに文房具屋があつたはずだ。薬屋から宿屋へ向かう途中で見た気がする。

「ああ、あつた」

お目当ての店を見つけた俺は文房具屋へ入って羊皮紙とインクとペンを購入した。

「さて、洋服屋へ行くか」

「……買ってくれるの？」

目をキラキラさせるユキには申し訳ないが、さすがに五人分の服を購入できるだけのGは無い。だから俺は首を振る。

「それはまたいつか今度だな」

不満顔を隠そうとしないユキに苦笑しながら俺は洋服屋へと歩を進めた。

「ここはお前らが来る所じゃない！ 帰れ帰れ！」

案の定、店員に入ること断られる。

まあ、そうだろうな。

浮浪児の集団など洋服屋に縁など無いからな。あつたとしても万引きか。

「はい、これ」

俺は店員に断られるのを想定済みだったので動揺なく10Gを店員に握らせる。

「え？」

突然の出来事に驚いたものの、店員は得心が言ったように後ろへと下がった。

「さあ、入るぞ」

後ろで所在なさにうろろうしていた四人に俺はそう呼びかけた。

「気に入った服があれば俺に見せてくれ。ただし、絹を使っている服は駄目だ」

変な指示だと思ったのだろう、代表してキツカが尋ねる。

「どういうこと？」

「レベル上絹素材で服を作成するのは無理だからな」

木綿や麻、布は今の俺でも作れるが、絹になるとレベルが二ケタ必要だ。

「もしかしてあんた、服を作れるの？」

「ああ、それが何か」

店で装備を買うのは中級者まで。上級者になると装備は全て自作になる。

何せ一人一人のプレイヤーに個性が出るため店のものでは対応できなくなるのだ。

俺も最終的にはドラゴンアーマーなどを普通に作っていた。

「……どうした？」

ユキを除いた全員がポカンとした表情で俺を見つめる。

NPCが戦闘以外で驚くことなんてあったっけ？

俺が内心で首を捻っている間に四人が集まってコソコソ話し合っていた。

「ちよつとアイラ、私達つてすごい人を見つけたんじゃないの？」

「ええ、私もここまでは思いませんでした」

「夢なのかもしれないよ」

「……それなら殴ってあげる」

興奮しているのか全然内緒話になっていない。

俺はため息をついて先を促した。

「おい、早く決めてくれ」

洋服屋から出た俺達は布屋へと向かう。

上質な布は4桁Gもするが、生憎と今の俺達には用が無い。あるのは値段がB単位の布だ。

「ええと、緑色と青、そして赤色の麻と黒と白と黄色の綿だな」

羊皮紙に書いた字を眺めながら俺は注文する。

お金を払って商品を受け取った。

「荷物持ちは任せて」

後ろの方で控えていたクロスが俺の代わりに受け取る。四人分の布だから結構重いはずだが、クロスは顔色一つ変えなかった。

「力が合って羨ましいな」

ポーション一つ作るにもしんどい俺がそう漏らすとクロスは困ったようにはにかんだ。

その後には雑貨屋へ行つて糸と針とボタンを購入した。

「一人一泊20Gです」

「分かった」

俺は領いて五人分の代金を支払った。

俺達がいる場所は宿泊街の一角にある宿屋だ。

本来なら薬屋のお姉さんが勧めた宿屋に入る予定だったのだが、出費が増えたのでお金が足りなくなった。

困っていた俺にこちら辺の地理に詳しいキツカがいい宿があると助言して今、ここにいます。

「悪くはないな」

キツカ推薦の宿屋に入った第一印象がそれだった。

『マミエルの夢』という名の宿屋で、一階が酒場そして二階が宿屋のオードソックスな冒険者の宿だった。

三人部屋を二つ借りて俺とクロス、そしてキツカとアイラ、そしてユキに分かれた。

本来なら二人部屋を借りるのだが、これから作業するので手広い部屋が欲しかったのだ。

俺は主人に別料金として石鹸とお湯の代金を支払って四人に入るよう促した。

もちろんレディーファーストだ。

三人部屋に五人は多過ぎだろうと考えたが、俺達は子供だったので十分スペースがあった。

全員集まったところで俺は買ってきた布で服を作りながら話を切り出す。

「ここは何という街だ？」

俺の質問にアイラが答える。

「シマール国の王都、カルギュラスです」

「カルギュラス……」

俺は口の中で反芻させる。

ユーカリア大陸においてカルギュラスという名の場所があった気がする。

しかし、俺が知っている中では少なくとも街じゃなかった。

「廃墟じゃないのか？」

ゲーム上の設定ならばカルギュラスは魔物の大進行によって滅びているはずだ。俺が昔クエストでその場所へ向かったのだから間違いない。

「何を言っているのですか？」

アイラが首を傾げる。そうだろうな、俺がアイラの立場でもそう言うだろうな。

気になった俺は今日の年数を尋ねてみるが。

「さあ？」

と、返された…… まあ、浮浪児に年数など知っているわけないよな。そこら辺りは明日薬屋のお姉さんに尋ねてみるか。

「ほい、一着完成」

ユキの服が完成した。白をベースとしたワンピースでアクセントとしてリボンが付いている。

「……ありがとう」

そっけない返事だが、内心は大いに喜んでいるのが分かる。だって耳たぶが赤いもん。

「明日からはどうする予定ですか？」

アイラが明日からについて聞いてくるので俺は正直に話した。

「明日の午前中はポーシヨンの材料となる草を取る予定だ」

「ポーシヨン？ 草？」

アイラが疑問符を浮かべるので俺は苦笑して訳を説明する。

「実は今日薬屋の主人であるティータさんと交渉してポーシヨン一個につき三十Gで引き取る取引をしているんだ。だからポーシヨンの材料となる草を集めるわけ」

俺がそこまで言うと、他の四人はまた隅っこで集まって内緒話を始めた。

「ねえ、聞いた？ あいつは安定的な収入があるのよ」

「これならもうゴミ漁りしなくて済みそうですね」

「これは夢だ、きつと夢だ」

「……可愛い服」

若干一名会話に加わっていないように見える。

しかもやはり声が大きいので内緒話になっていない。

「ほら、出来たぞ」

俺はアイラが選んだ黄色のブラウスと青色のロングスカートのセツトを横に置いた。

無論、アイラがすごい勢いで取りに来たのは言うまでも無い。

こういう所はやはり女の子で子供何だなあと、外見子供の俺が微笑ましく思った。

「あの、お手伝いできませんか」

次の服の作成に取り掛かっているとクロスが口火を切った。

「ん？　どういうことだ？」

手の動きは止めないまでも俺は返事をする。

「アカイ口草とアオイ口草、そしてキイ口草を集めているんですよ」

「そうだな。ポーション作りにはその三つが不可欠だ」

「それらの草は雑草でどこにでも生えています。だから自分達がそれを集めるといふのはどうかな？」

「そうしてくれると助かるな、手間が省ける」

俺がそう答えるとクロスはパツと顔を明るくして。

「そうですか、ありがとうございます」

「礼はいい。そして、キツカの服が出来たぞ」

赤を基調としたこの世界のオードソックスな服装なのだが、スリートでなくズボンとしているのはキツカは動きやすい冒険者が着るような服を選んでいたのである。

キツカがそれをうつとりと見つめているのを見ると俺も嬉しくなる。作った甲斐があった。

「ああ、それなら作業用の服を作るための布を買ってくるんだっとな」

俺は失敗に気付く。

雑草を拾うとなれば当然服は汚れてしまう。そして、俺がさっき作った服は彼らのお気に入りであり、機能性は重視されていない。

「……大丈夫」

さて、どうしたものかと悩んでいると、それを察知したのかユキが慰めにくる。

「何が大丈夫なんだ？」

「私達は雑草取りをしない。その代わりにユウキが作った服を売る」
「なるほどね、そういうことか」

俺の技能はポーション作りだけでない。今、実演しているように

裁縫も得意だ。だから服を作ってそれを売ればいいとユキは提案していた、が。

「それは止めた方が良い」

露天商は俺もやろうとしたが、リスクが高すぎて止めた。シヨバ代とか言って金を取られるならまだしも変な奴らと関わり合いたくない。

「言い方は悪いが君達から俺の情報に辿り着く奴らが現れないとは限らない。俺はまだ目立ちたくないんだ」

いずれは関わり合いになることだろう。

しかし、それは今でない。

何の力も無しに闇の者と関わり合うと待っているのはゲームオーバーだ。

「……残念」

ユキは不満そうな顔をしていたが、俺が絶対に折れないことを悟るとしつぶ引き下がってくれた。

俺はそんなユキの頭をポンポンと叩いて。

「アイディア出してくれたことは嬉しい、だからそんなに落ち込まなくてもいいぞ。そして、クロスの服だ」

クロスはTシャツに短パンと少年らしい服装を好んでいた。アキュセントとしてポケットが四つも付いている。

全員の服を作り終えた俺はウーンツッと一伸びした後彼らに言った。

「君達全員にお小遣いを上げるから明日は街で遊んでおいで。けれど明日からはちゃんと働いてもらうよ……って、聞いていないな」

四人は俺が自作した服を眺めるのに頭が一杯らしい。全員が興奮した面持ちで服の見せあいをしている。

俺はその様子を眺めながらベッドへ横になる。

ふかふかの感触を楽しみながら今日一日の出来事について思いを馳せた。

いきなりログアウト出来なくなったり、ステータスが貧弱だった

りするが、今日の行動は悪くなかったな。

明日からはティータさんの所へ行ってポーション作りだ。これでしばらくお金を稼ぐか。

そう言えば靴を作るのを忘れていたな、明日も雑貨屋さんへ行って材料となる皮でも買うか。

頭がぼんやりしてきた。どうやら本格的に寝るらしい。

いつも思っけどゲームの中で眠るというのは不思議な感覚がするんだよな。

そう言えば大事なことを忘れていた気がする。

確か、何だっけ？

俺は睡魔によって使い物にならなくなった脳をフル回転させ、次にキツカやアイラ達が持っている服を見て思い出した。

あ、自分の服のことを忘れていた。

紺屋の白袴（後書き）

次の話の内容は半月ほど時間が飛んだ時点から始まります。

四人が素材を集めて主人公のユウキがポーションを作る。

そんな日々が続いていたのですが、ある日にクロスがお願いをユウキにすることになります。

さて、その内容とは。

魔物退治（前書き）

すいません。

予告通りの内容にはなりませんでした。

内容が長くなり過ぎましたので二分割します。

魔物退治

カンカンカンカーン！

ジューー！

「うん、まあまあかな」

俺は先程製造が終わった青銅の剣にそう評価を下す。

この武器はキツカが使用するので市販の青銅の剣よりも細くして軽さを上げていた。

けど、強度まで下げたわけじゃないから。むしろ2倍以上の耐久性がこの軽い青銅の剣に宿っている。

キツカは「大人と同じ武器を扱いたい」とか駄々こねていたけど、どれだけ粹がっていても俺達は12歳の子供だからね、大の大人が使う武器を軽々しく振りまわせないから。

「さてと、後はアイラが使うボウガンの矢じりとユキが使うロッドだけか。おじちゃん、まだ使わせてもらって良い？」

俺が店に奥にいる職人にそう尋ねると「あいよ」という返事が返ってきた。

良かった、これで今日中に作れそうだ。

何せクロスは力があるので普通の武器と比べて一回り大きいのを
作る予定だった。サイクロプスやキングアリゲーターなど大型モン
スターとの闘いを想定した武器で、例えば鎧を着ていても、鎧ごと一
刀両断するのを作ろうとしたが、それが想像以上に大変だった。

俺はこの時ほど子供であることを悔やんだ経験は無かった。

何せ重い。

ハンマーを打つのに水で冷却するのにも既存の武器と比べて倍
以上の負担がかかる。

たった2倍程度の負担ぐらいどうってことないと考えた時期が俺
にはありました。

もし、過去に戻るのならその時の自分を殴ってやりたいです。

手を抜くと失敗してしまうから休めません。正直最後の方は意識
が朦朧としていました。

どうやって宿屋に帰ったのか覚えていません。

気が付いたら朝でした。

筋肉痛で腕がえらいことになっていましたが、納品であるポーシ
ョンを作成しなければならぬので根性でやり遂げました。

ちなみに俺が作った『鋼の大剣』をクロスは軽々と振り回してい
ました。

……俺は持つことすらできないのに。

勉強とは大事なものだ。

それを怠ると最悪死へと繋がる。

だから俺は心を鬼にしなければならない時がある。

「もう勉強嫌〜」

そう、例えばキツカを鎖と手錠で机に拘束させてでも知識を叩きこむ必要があるのだ。

「だから何度でも言っているだろう。字を覚えろと、それが出来なければ何も始まらないぞ」

「字を読めなくても、勉強できなくても死なない〜」

「死ぬから言っただろうが!」

俺の一喝が部屋に響き渡った。

「まったく、キツカ以外はすでに魔物特性の勉強に入っているのに、お前だけは机にじっとしていることすらできないよな」

浮浪児としての生活が長かったのか、最初の内は全員椅子に座っても5分すら持たなかった。まあ、浮浪児として行動しなければ死んでいたのだからじっと出来ないのは大目に見よう。

「放して、自由にさせて」

が、それがいつまでも続くとさすがの俺も堪忍袋の緒が切れそう
だ。なので俺は仕置きを兼ねてある紫色の液体を取り出した。

「そ、それは？」

キツカの動きがピタリと止まり、視線が俺の手に持っている液体
へ釘づけになる。

「そう、精神安定剤入りポーションだ。これを飲めばキツカも大人
しくはなる」

ポーションにリラックス草加えると、飲んだ者を落ち着かせると
いう効力を持つ。アイラ達にも最初の内は椅子に座らせるためにこ
れを飲ませていた。

「いやー！ 苦いのいやー！」

ただこの薬、相当苦い。俺も一舐めしたが体が壊れるかと思った。
例えるならゴーヤの中身の部分を5倍に濃縮した苦さと言っべきだ
ろうか。

もしかするとアイラ達が素直に座ったのはポーションの効能なの
ではなく、二度とこの薬を飲みたいくない恐怖観念からゆえだろうか。

「さあ、口を開けておけよ。でないと鼻から入れるぞ」

「たすけ〜て〜!!」

キツカの悲鳴が宿屋中に響き渡った。

昼前

外へと繋がる門の前に4人の少年少女が整列し、その前に1人の少女が剣を掲げていた。

俺、キツカ、アイラ、ユキ、そしてクロスが装着している武器防具は全て俺の手作りだ。

ユウキ

青銅のダガー

革の鎧

革の小手

布の靴

キツカ

青銅の剣

プレートメイル

青銅の楯

革の靴

アイラ

青銅のボウガン

プレートメイル

ガントレット

革の靴

ユキ

ファイアロッド

絹のローブ

革の小手

布の靴

これだけ装備が充実していれば死ぬことはまずありえないだろう。どんなゲームにも最も装備は重要な位置を占める。装備を侮る者に勝利などありはしない。

その問いに否と答えるならば序盤から装備を一切変えずにラスボスまで行ってみてほしい。大抵の人は挫折するだろう。つまりそれだけ装備は大事だということだ。

俺が作った装備のおかげでキツカ達はレベルこそ一だが、そのステータスはレベル10程度にまで引き上げられている。近辺の魔物の生息についても確認したが、レベルが5もあれば集団で襲われても戦えるほどの難易度らしい。これなら負けることはないだろう。

ただ……

クロス

鋼の大剣

鋼の鎧

鋼の楯

鋼のすね当て

はい、1人だけ別格がいます。

おそらくクロスのステータスはレベル15にまで引き上げられています。

一度キツカがクロスを羨ましがって鋼の楯を装備してみたけど、腕すら上げられない有様でした。

本当にクロスは俺と同じ12歳かと疑ったよ。

クロスが12歳と言うのは俺以外全員が主張していたけどね。

ああ、それとユキは魔法の才能があるらしいので魔法の扱い方について多少レクチャーした。

まだ火の玉が出る程度だけど、この辺りの敵だとそれで良いだろう。

ユキはもつと火力を望んでいたが、危ないので教えなかった。

ちなみに俺の現在のスキル。

剣	6
魔法	5
斧	7
採取	8

弓矢	5
料理	8
鍛冶	10
調合	15
裁縫	10

ポーション調合やら草採取やら武器作りやら4人に戦い方を教える
やらでこの半月の間に相当上がりました。

裁縫がこんなに高いのは俺が每晚簡単な服を作っているからだ。作
成した服は4人を通して無料で配って歩いている。

これは利益度外視で行っている。

裁縫というのは後々になってから重要になる。

極論を言えば剣や魔法などよりも重要。

何せ状態異常を防いでくれる防具を作ろうと思えば裁縫が必須だか
らね。

裁縫をめんどくさがって上げなかった俺は後でどれだけ苦労したか。

一ヶ月ぐらいずっと裁縫していた記憶がある。

おかげで学校の家庭科でSを取りました。

「皆、装備は持ったわね？」

一番張り切っているのが剣を掲げているキツカ。

聞くところによると昨日は興奮して眠れなかったらしい。

アイラとユキが眠そうに目を擦っている。

「ユウキ、ポーションは大丈夫？」

確認することは良いことだが剣を俺のど元へ突き付けるな。万が一があつたらどうする。

「ポーション、ポイズンボトル、パラライアウト、スリープブレイクなど近隣のモンスターが使う状態異常に対する対策は整っている」

「そう、上々ね」

キツカが当然とばかりに頷くがこれらは高いんだぞ。

もし俺が作った薬を一式買おうとすれば300Gは普通に飛ぶという事実を忘れてはいまいか。

と、ここでユキがクイクイと俺の袖を引っ張った。

「…………お弁当は？」

「全部ユキの好物にしている」

「ん」

俺の答えに満足したのかユキは満足そうに頷いた。

「思えばここまでの道のりは長かったわ」

外に出た俺達はキツカを先頭にして進んでいると、不意にキツカがそう口火を切った。

「この瞬間を私はどれだけ待ち望んでいたか」

「感動するのは勝手だがキツカがちゃんと俺の教えた通りにしていればもっと早かったぞ」

今は青銅のダガーしか装備出来ない俺だが、前のデータの時は剣術もレベル93あった。だからその経験を生かして戦いの基本を教えていたのだがキツカは全然聞いてくれなかった。

「あんな型に嵌った動きじゃ意味無いわよ」

このクソガキめ。

アークドラゴンやジェネラルオークなど一級モンスターを相手にしていた俺に言うか？

畜生、少年の体が憎い。

そうこうしている内に近くの草むらが動き、ついでモンスターが飛び出してきた。

相手はワームやビッグアントなど雑魚モンスター。

これといった特殊攻撃も無いので落ち着いて対処すればいいのだ

が、いかんせんこちらは初めての戦い。

クロスも顔がこわばって大剣が震えていた。

仕方ない、ここは経験者である俺が先手を出てや。

「うりゃあ」

「ふっ」

「……ファイアボール」

俺がクロスを案じている間にすでに戦闘は始まっていたようです。

それにしても内の女性陣は容赦無いなあ。

キツカは喜々としてモンスターに斬りかかり、アイラは冷静にモンスターの目など急所を射抜いている。そして感情の表現の乏しいユキでさえ正確に魔法を詠唱・発動していた。

モンスターも抵抗とばかりに攻撃を仕掛けてくるが俺の作った防具に阻まれてダメージどころか足止めにもなっていない。

「ふっ、口ほどにもないわね」

最後のモンスターを切り捨てたキツカが軽く決めポーズを取った。

「俺の出番はなしですか」

俺は呆れ調子で呟く。

これならばもう少し装備を弱くしても大丈夫なのではないだろうかと考えてしまうほど一方的だった。

その後は祭り状態に近かった。

モンスターを発見すると俺を除く全員が突撃してあっという間に息の根を止める。

それが単体だろうが集団だろうがお構いなしに突撃して刈って刈って狩りまくった。

「見て見て！ 『剣』のスキルが5よ。随分上がったと思わない？」

「私は『弓矢』が6ですけどね」

「何で私よりアイラの方が上なのよ！？」

「私の武器はこれですからね、当然です」

「ボウガンは卑怯よ！」

モンスター狩りに一息ついた俺達は持ってきた弁当で昼食を取っていた。

キツカとアイラはお互いのレベルについてやいのやいの言い合っている。

「本当に彼女達の元気は底なしだなあ」

クロスがそんなことを言うが、あんな重装備で軽装備の俺達と同様の運動量にも関わらず、息一つ乱さないというのはどういうことだ？

「……美味しい」

具が気に入ったのだろう、黙々と弁当を食べるユキ。

その様子は小動物みたいで可愛い。

「ほら、これも食べる」

だから俺は自分の分から一つおかずをユキに差し出す。

「……くれるの？」

するとユキは目を輝かせて俺に尋ねてきたので「ああ」と答える
と。

「……ありがとう」

「って、おい!？」

あろうことがユキはおかずでなく俺の弁当箱をひったくった。

アハハハハハ

草原に軽やかな笑い声が響いた。

魔物退治（後書き）

次こそがクロスが主人公にお願いする場面です。
約束を破ってしまい、申し訳ありませんでした。

魔物退治についてどうして子供達が魔物を相手にできるのか説明が
不足していたため追加しました。

目標達成

ゴリゴリゴリゴリ

「よし、これでノルマの三〇本完成」

俺はいつもの通りに薬屋でポーションを作っていた。

「お疲れ」

薬屋のお姉さんであるティータさんが、俺が終わったのを見計らって出てきた。

「そう言えば今日は友達と一緒にいなくて良いの？」

ティータさんは俺達が外へ出て魔物の討伐をしているとは信じていない、だから俺はその問いかけに苦笑して。

「最近はお前抜きで遊んで（戦って）いるんだよ」

最初の数回は全員揃って出ないと街外へ出なかったが、最近はお前でも行くようになった。

俺はソロで行くのは大変危険だと懸念したのだがそれは杞憂に終わった。

キツカ、アイラ、ユキそしてクロスは長い間浮浪児としてスラムを生き抜いている。

そのため野生の勘が研ぎ澄まされているのか危険に関しては敏感だ。

先日、苦勞しそうなキングワームに遭遇した時も一人で突っ走らずに俺を含めて五人が見事なコンビネーションを発揮して敵を沈めていた。

だから大丈夫だと俺は判断している。

「あらら、はぶられちゃったの？」

こちらの状況を誤解しているティータさんのセリフに俺は苦笑を深めてしまった。

そして話題を切り替えるためにポーションを渡す。

「はい、これが今日の分」

「いつもいつも御苦勞様。ボクの作ったポーションは常連さんから評判が高いわよ」

ティータさんはいつまでたっても俺をボクと呼んで子供扱いする。それがたまに不愉快だと感じる時があるけど、それを責めてもティータさんは決して改めようとしなないことが分かっていたから俺はもう諦めている。

「明日もポーションだけで良い？ 何ならポイズンボトルやパラライアウトも作るけど」

「お生憎様、そちらは事足りているの」

「残念」

俺は肩を竦める。状態異常回復系はポジションより高く売れるが需要が少ない。

俺がポジションに拘る理由の一つだった。

最も、ティータさんに言わせると。

「状態異常回復系の調合の方が難しいんだけどね」

らしい。

まあ、調合レベル105だった俺から見るとポジションもポイズンボトルも一緒なんだけどな。

「そう言えばボク、結構稼いだんじゃないの？」

「うん、僕は今10000G以上持っているよ」

ポジションは一日30個と決まっているが、たまに予約買出しなど大口取引が三、四回あった。

大口取引一回につき大体ポジション二〇〇個ぐらい頼まれるから相当稼いだものだ。

大口取引は契約外として大目に一個40Gで買い取って貰えたからこちらはホクホクだ。

「で、それがどうしたの？」

「ボクって何でお金を集めているの？」

「それは家を持つためだよ」

家を持つことが出来れば大型の調合台や鍛冶場などが創設できるので、これ以上誰かの場所を借りなくて済む。

この調合台もポーション作りのみ認められていて、それ以外の使用は料金を取られていた。それが無料になれば今後の活動がぐっと広まることは予想できる。

「ねえ、ボク。提案何だけど、そのお金を担保にして家を手に入れない？」

「どうということ？」

「近々郊外に空き家が出るのよ。で、その家の持ち主は色々なことをやっていたらしくて調合台や鍛冶場は勿論のことキッチンや畑まで完備しているのよ」

「へえ」

俺は感嘆する。もしこの話が真実ならばそれは非常に嬉しいことだ。

俺が家を持った暁にはそうだったものをいずれ作る予定だったから、それが省けて非常に助かる。俺にとっては非常に面白い話だが。

「まずその家を見たいのだけど」

ティータさんが俺を騙すことなんてないが、確認のため聞いておく。

するとティータさんは唇の端を吊り上げて。

「そう言うと思ったわ、この店が閉店してから向かいましょう」

閉店になった時刻に俺は薬屋の前で待機していた。

しばらくするとティータさんが現れる。

「お待たせ、待った？」

「いや、僕も今来たところだよ」

ここは社交辞令。

本当は1時間ほど待たされていた。

「ここがそうよ」

馬車で揺られること30分、目的の場所へと辿り着く。

まず始めに俺は立っている場所と紙で示されている場所とを示し合わせて誤りがないことを確認した。何せ他人の家を案内されちゃたまらない。

「ボクって用心深いわね」

ティータさんが感心と苦笑の入り混じった表情をした。

それはアイラから口を酸っぱくして言われていたからな。

この二テイルス（二ヶ月）アイラは俺に詐欺師のテクニックについて何度もレクチャーしてくれた。

アイラ曰く俺は騙されやすいのだから、詐欺師がどのようにして人を騙すのか方法ぐらいは知っておきなさい、らしい。

「ほう……」

俺は感嘆のため息を零す。

中の様相は俺が家を買ったところという想像を具現化したようだったからだ。

ちょっとした屋敷になっており、執事やメイドがいてもおかしくない。

そして外には広い畑もあって離れには鍛冶場も備え付けられている。

家の中を拝見してみる。

一階は大きな広間となっており、ドアを隔てた先には調合台やキッチンがある。そして二階へ続く階段を上がると、部屋がいくつもある。

これなら一人ずつ部屋を割り振ることが出来るだろう。

「これは本当に良い物件だね」

心なしか俺は興奮していた。

ここでティータさんが切り出す。

「で、この家なんだけど、おそらく300000Gで売りに出されると思うわ」

「300000か……」

俺は考え込む。

今あるお金がとてもしゃないけど払えない。しかし、この家は絶対に欲しい。

「これは提案何だけど、今のお金じゃボクが家を買えないから、私も一緒に出してあげる。そして200000Gはボクが返してくれば良いよ」

「え？ どういうこと？」

「だから私が残りの200000Gを払うということ。ボクには結構

お世話になっているからね。これまでの利益を考えるとこれくらい安いものよ」

ティータさんは俺の作ったポジションを100Gで販売している。

つまり少なく見積もっても30000Gはあるのだ。

「けど、それは悪い気がする」

「何言っているの、ボクは家が欲しかったのでしよう。あの時、私から今日の年数を聞いた時から人が変わったようにお金を集め出したわ」

現在はイルヴァナス歴四五八年。

そして魔物による大進行によってこのカルギュラスが廃墟となるのが四六三年。

つまり後五年でこの都市は跡形もなくなってしまうのだ。

それを聞いた瞬間俺は今までの戦略を見直す必要が出てきたと感じた。

本来ならばこの都市を拠点としてゆつくりと力を付けようと考えていたが、それは諦める。

俺は前の住み家だった工業都市ジグサールに移り住み、そこで力を付ける計画へ変更した。

しかし、工業都市ジグサールの周辺にはこと比べ物にならない

強大な敵が徘徊している。

五人組のパーティでも平均レベルが30以上必要だろう。

当然ながら今の俺にその都市へ辿り着くことは不可能。

だから俺は一年以内に家を持ち、そこで各スキルのレベルを上げるのと並行して自分のレベルを上げることにした。

そのための第一歩として必要だったのが家だったのだ。

俺が黙りこんでいるのを見て何を思ったのか、ティータさんは腰を下ろして視線を下げ、俺の肩を掴んで語りかける。

「ボクが何を考えているのかお姉さんに分からないけど、ボクが焦っているのは伝わってきているよ。一度力を抜いて深呼吸して。ほら、少なくともお姉さんはボクの味方だよ」

俺は我知らず赤面した。

ティータさんは俺の母親に似ている気がする。

そう言えば母さんも今の様な恥ずかしいセリフを真顔で言っていた気がする。

あの時は何とも思わなかったが、今のようになるとこんなにも嬉しくなる。

そしてティータさんは立ち上がってニコリと微笑んだ。

「さあ、行きましょう。早くしないとこの家を誰かに取られてしま
うよ」

それを聞いた俺は慌てて先へと進むティータさんの後を追った。

数日後、俺は驚かせたいものがあると言ってキツカ、アイラ、ユ
キ、そしてクロスを連れ出した。

「ねえ、どこに行くの」

初めて乗る馬車に戸惑っているのか所在なさげにしているキツカ。

それに俺は「着いたら解る」と笑った。

そして到着。

「ここは何だと思う?」

俺が四人に聞くと、しばらく考え込み、最初にアイラが手を上げ
た。

「立派な屋敷ですね」

「そう、立派な屋敷だ。で、これは誰のものだと思う?」

ここまで言うといくらをはじめ全員が理解したらしい、目を丸く
見開いてありえないというように首を振った。

「まさかこれは」

「そう、アイラの想像通り、俺達の家だ」

それを示すかの様に表紙には俺達五人の名前が記されていた。

「そして、さらにサプライズがある」

俺は隠していた小箱を目の前に持ってくる。

「家を持ったということは社会的地位があるということだ。どういうことだと思う?」

俺が尋ねると今度はユキが。

「……市民になれる」

「そう、その通り。これが俺達五人の市民証明書だ」

ティータさんに用意して貰った羊皮紙を一人一人に手渡す。

この市民証明書は『市民』になるために必須なものだ。

これで俺のステータスが『浮浪児』から『市民』に昇格できる。

『市民』になると出来ることがグッと広まる。

病院で診てもらえるし、図書館も利用できる。政治にも関わることが出来る。

そして何より俺は自分で作った物を自分で売ることが出来るのだ。
何せ『市民』だから。

人間と認められた証だから闇の者もおいそれと手出しが出来ない。
つまり、遠慮なく商売が出来る。

あ、もちろん薬だけはティータさんの所で売るよ。
そうするのが礼儀というものだろう。

はい、感傷終わり。

「さてと、入ろう。俺達の城」

「待って下さい！」

俺がそう宣言して一歩踏み出そうとした時、突然クロスが大声を出した。

俺はつんめのってしまふ。

「これさえあれば自分達は市民なんですよね」

「まあ、そうなるけど」

ぶつけてしまった鼻頭を押さえながら俺は答える。

すごく痛いし、それ以上に恥ずかしいぞ。キツカもクスクスと笑っているし。

「学校にも通えるんですよね」

「市民だから当然の権利だな」

「だったら、お願いします！」

クロスは両膝について地に頭を擦りつけ始めた。

この出来事には俺を含めて全員が驚く。

「自分達を学校へ通わせて下さい！」

そしてクロスは思いの丈を語り始めた。

「僕は昔から騎士に憧れていました。将来は騎士となって国を守りたいと考えてきました。けれど僕は市民権を持たない浮浪児です。騎士になるための試験など受けることが出来ません！」

普段は温厚なクロスがここまで熱く語るとは。

よほど騎士への思いがあるに違いない。

さて、どうしよう。

学校へ通うとなるならばそれだけお金が必要となる。しかも騎士の養成学校となればなおさらだ。どれだけ低く見積もって通常に三

倍はかかるだろう。

「けど、まあ良いか」

あのクロスが自己主張しているんだ。

普段から我がままを言わないことを鑑みればそれぐらい良いだろう。

幸いにも『市民』になったから金策のあてはあるし。

「分かった、学費は俺が何とかしよう。だから君は学校に行ってくれば良い」

俺はそう言っただけで立ち上がらせようとしたがクロスは頑として動こうとしない。何故かと燻しんでいるとさらに言葉を紡いだ。

「僕だけじゃないんです。キツカやアイラ、そしてユキも一緒にお願います」

「く、クロス!?!」

「何を言っているのですか!?!」

「……」

それにはさすがにキツカとアイラ、そしてユキが反応した。

「キツカは冒険者に、アイラはレンジャーにそしてユキは魔法使いになりたいのです。ですから、僕だけでなく彼女達も一緒にお願

します！」

「ふむ、それは本当か？」

俺がジロリと視線を向けると、3人はバツが悪そうな顔をするが、
イエエとは答えなかった。つまり彼女達は学校に通いたいのだろう。

「しかし、まあ揃いも揃って学費が高い所ばかり」

どれもこれも全部学費が通常の学校と比べて高い。

そして最も高いのが、ユキが希望する魔法使いのための学校で、
これは通常の学校の学費の五倍はする。

4人全員にかかる学費を合わせると、通常の学校に14人送り込
めるほどの莫大な金額が掛かる。

これはさすがの俺も躊躇してしまう。

この家も二万Gの借金があるし。

俺は四人を見ながら思案する。

果たして四人にそれだけの投資をする価値があるのかどうか。

それらの学校では良い教育を受けられるから、もし四人全員が付
いてきてくれるのなら工業都市ジグサールまでへの道のりは楽に
なるだろう。

ジグサールさえ辿り着ければ何とかなるから俺についてくるなり

別れるなり好きにして貰っても構わない。

しかし、それはあくまで順調に事が進んだ場合だ。

もし俺に何かあれば学費の支払いは不可能になり、彼らは学校を辞めてもらうしかない。そうなれば今までの投資も水泡に帰してしまう。

逆に彼らが問題を起こしてしまっても水泡に帰す。

ここは重要な分岐点となる。

学校に行かせるか否か。

投資をするか否か。

考え、考える。

キツカ、アイラ、ユキ、そしてクロスを順に眺めながら俺はどうするか思考をフル回転させる。

20分ほど経ったのだろうか。

その間誰一人声を出さなかった。

その様子を見て俺は四人の覚悟を知った。

「Be ambitious 大志を抱け」

俺はそつ口ずさんだ。

誰かが言ったのかを忘れたが、とても良い言葉だった気がする。

よく考えると俺は現実世界でも目の前の彼らの様な友人もいなかったし、将来はこうなりたいと考えることも無かった。

ただ、ゲームをしてさえできれば何も要らなかった。

だからこそ俺は彼らが眩しく映る。

俺に持っていない何かを持っているキツカ、アイラ、ユキそしてクロスが羨ましい。

「良いだろう」

俺は呟く。

「そこまでやりたいことがあるのなら、全てを出し切れ」

「では」

クロスが目を輝かせたので、俺は深く頷いて。

「自分が望むままにやってこい」

「「「「あ、ありがとうございます」」」」

四人全員が感激した面持ちで同時に頭を下げてきた。

「さてと、これからが大変だぞ。お前達は字が読めるか。それが出来ないと話にもならん。だから明日から特訓だ」

俺は照れくさかったので踵を返し、これからしばらくお世話になるであろう家に歩を進めた。

柄にもないことを言ったと自覚している。

今の俺はきつと変な顔をしているだろう。

このまま何事もなく自室に閉じこもって暴れたい衝動に囚われて集中力が疎かになった結果。

「大好きー!」

「必ず応えます」

「……一生忘れない」

「ありがとうございます!」

「おわあ!」

キツカ、アイラ、ユキそしてクロスから抱き付かれてもみくちゃにされた。

目標達成（後書き）

予告通りクロスが主人公にお願いしました。

けど、失敗した感が否めません。

慣れないことはするものではないと痛感しました。

これで第一部は終了です。

無一文から家を持つまでの流れでしたが、流れが速過ぎたのではないかと反省しております。

第二章入る前に番外編としてアイラ視点でこれまでの流れを紹介したいと考えています。

番外編 アイラの視点（前書き）

番外編です。

ですので読まなくとも小説の流れに差し支えはありません。

主人公が拾った四人組の一人であるアイラ視点で第一話から第五話まで進みます。

アイラが主人公の活躍を見てどのように感じたのかを想像して頂けると幸いです。

番外編 アイラの視点

『市民』になること。

それは私を含めた全浮浪児が持つ願いであり叶わない夢であった。

私、アイラは親の顔を覚えていない。

物心ついた時には既に浮浪児としてその日その日を生き抜くのに必死だった。

ましてや私は女の子。

一人だと喰われて終わり。

だから生きるための知恵として私は仲間を組んでいた。

思い切りは良いけど猪突猛進なキツカ。

天然不思議系のマスコットキャラクターであるユキ。

気は弱いけど力と体格は規格外のクロス。

そして常に周囲の気を配って策謀を張り巡らせる私。

この四人で徒党を組んで過ごしていた。

盗みは日常茶飯事、詐欺や置き引きも普通にやっていた。

基本的に計画の立案は私で実行するのがキツカ。

たまに他の浮浪児グループと一触即発状態になった時はクロスの出番。

あいつは気が弱いけど力が強いから大抵の浮浪児は彼一人でどうにかなる。

ユキは……何でいるのか私も分からないわね。

いつの間にか私達の仲間に加わっており、気が付けば行動を共にしていたみたい。

邪魔にならないようだからチームのマスコットとして置いている。

それだけ。

それだけのはずだったのに、ユキがあいつを見付けてきたのは驚いたわ。

ユキは珍しくパンの入った袋という戦利品を手中にして戻って来たとき、私はパンの持ち主について興味を持った。

このパンは浮浪者専用のパン屋でしょう。

ならば必然的に持ち主は市民証を持っていない浮浪者ということ

になるわね。

ユキが言うにはこのパンを一人で持っていたという。

この量のパンを一人で？ 仲間もないのに？

少なくともただの浮浪者じゃない。

身元の知らないユキにあっさりとパンを奪われたことも相まって私は会ってみたいと感じた。

よほどの大馬鹿者かそれとも……

「提案があります」

久しぶりのまともな食事ではしゃいでいる三人に向かって私はあの考えを披露した。

結論的に言えば、ユウキという少年は想像以上だった。

あの時の「私達を買って下さい」発言は吊り橋を目隠しで渡るぐらい危険な賭けだったけど、その分見合った報酬　きれいな服とお金を手に入れたわ。

今、ユウキはベッドで熟睡している。

私達にきれいな服を作ってくれたのに、ユウキはボロの服を着ているのは多分自分の分の服を作り忘れたのだろっ。

可愛いところあるじゃない。

ユウキはしばらく食べられるだけのお金を置いてくれたから、私はここから逃げ出そうかと提案したけど反対多数で却下となった。

いつもは賛成してくれるキツカが反対するとは珍しい。よほどユウキが作った服に感動したのね。

私の考えは却下されたけど、不思議と腹は立っていなかった。

それは無意識の部分で彼について行ったほうが良いと訴えているのかもしれない。

まあ、今すぐに離れる必要はないわ。

幸いにも明日は貰ったお金で色々と遊べるから思いっきり楽しもうかしら。

その途中で他のグループと会ったらどうしようかな。

洋服を着てお金を持っている私を見た彼らはきっと悔しがるだろうな。

思いっきり自慢してやろうかしらね。

……自慢した結果、私は毎日服や靴をスラム街の入口に置く約束をさせられたわ。

どうやら舞い上がっていたみたい、反省しなくちゃ。

そして、驚いたことにユウキは毎日服や靴を作ることを快諾したのよ。

いえ、良かったのよ。

でないと私達のグループは全浮浪児の敵になっていたから。

ありがとうございます、ユウキ。

どうやらユウキは私達を驚かせるのが大好きなようね。

いったいどこの世界に銅貨や金属ゴミから武器防具を作る浮浪児がいるのか。

Bの銅貨と錆びた水道管から青銅の盾を製造したのも十分驚いたけど、鋼の大剣まで作ってくるとは私の常識の範疇を超えていた。

確かに、鋼の大剣を作る設備が鍛冶屋にあるとはいえ（王都だから）限度というものがあるでしょう。ここまで運んできた鍛冶屋の若い職人が呆然としていましたよ。「俺ってまだまだ井の中の蛙だったんだなあ」とブツブツ呟きながら帰っていったわ。

ユウキはそれどころじゃないくらい疲労してベッドに倒れたから

知らないでしょうけどね。

それに、鋼の大剣を普通に買おうとすれば二千Gは下らないわよ。
どうやってそれを一個五S以下の屑鉄から製造できるの？

ユウキに尋ねると「俺はもっとすごい武器を作っていた」と、冗談なのか本当なのか判断に悩むセリフを吐いたわ。

「いゝやゝ、たゝすゝけゝてゝ！」

キツカが叫んでいるけどこればかりはどうしようもないわ。

だって勉強しないキツカが悪いんですから。

知恵を働かすには知識が必要。

知識を蓄えることを怠れば芳しくない結果が待っているわ。

さて、私達は外で飲み物でも飲みながら一服しましょうか。

鬼の居ぬ間に洗たく。

ユウキがキツカに構っている間は存分に休めるわ。

キツカの要望通りユウキは全員分の装備を作ってきた。

キツカは当然のことだけどクロスも重装備に身を固めて満更じやなさそうだったわ。

そう言えばクロスは最近騎士になりたいとか呟いていたわね。

浮浪児だったあの頃はそんなことを言わなかったけど、やはり衣食住が安定すると夢を追いたくなるのかしら。

キツカも前よりまして行動力が上がっていたわね。

前々から底なしのエネルギーの持ち主だったけど、近頃は輪をかけてその傾向が強いわ。

あんなにも快活で生き活きとしたキツカなんてしばらく見てなかった気がするわね。

そして、ユキに魔法の才能があることは素直に驚いた。

ユキは前々からユウキと何をしているのか分からなかったけど、どうやら魔法を教えられていたらしいわね。

後でユウキにそのことを追及するとユウキは「ユキが黙っておいてくれと言っから」とユキが口止めしていたみたい。

あの子にも誰かを驚かせたいと思う所があったようね。

まあ、そんな私も皆を脅かせようと密かにユウキからボウガンの扱い方を学んでいたけど。

けど、その驚きの半分はユキに取られちゃった。

少し悔しいわ。

後でお礼として詐欺師が使う人の騙し方について教えてあげるけど、少々厳しめにレクチャーしようかしら。

ユウキがブチ切れる可能性があるけど、しばらく一緒に暮らしたからある程度怒りの境界線は判断できるわ。

ふふ、こんなところで浮浪児だった経験が役に立つとは思わなかった。

今日も私は一人で魔物を狩る。

始めの内は四人揃ってから魔物を狩っていたけど、段々とそれがじれったくなつたので各自がバラバラに行動しようと提案したのよ。

ユウキは「それは危険だと」難色を示していたけど、私から言わせればスラムより百倍安全だわ。

武器もあるしポジションも持っているからそうそう大事にならないわいよ。

スラムで培った危険を察知する能力を舐めないでちょうだい。

そういった説得の結果、渋々ながらもユウキは単独行動を認めて

くれるようになったわ。

私は街の外にある森に身を隠し、気配を絶つてあるポイントに魔物が来るまで待ち続ける。

そして、魔物がそのポイントに入った瞬間に矢を放つ。

ユウキの作ったボウガンの糸は鋼糸を使用しているので、通常のより何倍も強い。

至近距離ならばベアー程度の頭蓋骨を貫通する程よ。

全く、本当に危険な代物を作ってくるわね。

急所を貫かれて絶命した魔物を確認した私は愛用のボウガンをつんと叩いた。

「あら？」

私は肉が焦げる匂いが漂ってきたのを感じた。

「どうやらユキもやっているようね」

ユキも積極的に狩りを行っているわ。

順番でいうとキツカ>私>ユキ>クロス>ユウキね。

ユウキはポーション作りがあるから仕方ないにしても、クロスはもうちょっと頑張れないかしら。

あれだけの重装備に身を固めているならばちょっとやそつとのもので死なないから思いつきり戦っても問題ないはずなのに。

私はクロスの臆病さは騎士としてやっていけるのか憂いた。

「つとと、今はそれよりもユキね」

ユキは魔法使いなので、私達より打たれ弱い。

万が一があつたら困るので私は様子を見に行くことにしましょう。

誤解の無いように言っておくとポーションのための材料は日替わりローションで個人個人が集めてユウキに渡しているわ。

さすがに材料集めを行わないほど私達は恩知らずでないと自覚しているわよ。

どうやら私も三人に感化されたようね。

ユウキがいない時に私達が集まると、決まって話すのが将来についてだったわ。

どうも私は隠密行動を好む傾向があるから、将来はレンジャーとして活躍したいわ。

キツカは冒険家、ユキは魔法使いでクロスは騎士。

ちよつと前の自分達が今の私達を見たら絶対驚くわね。

そして、キツカは魔物狩りをこの近辺だけでなく、隣街の周辺にまで足を伸ばしたいみたい。

けど、そこまで行っても私達は浮浪児だから通行証がない。

通行証があれば一度自分が行った街だと一瞬で行ける装置が使えるのだけど、市民しか貰えない。

ユウキがいてくれれば問題ないのだけど、生憎とユウキはポーシヨン作りで忙しい。そしてユウキ抜きで外で一泊できる程私達は自惚れていないわ。

そして、魔物狩り以上に私達は独学の限界を感じ始めていたわ。

もちろんユウキが教えてくれるのだけど、ユウキは体一つしかなく、食い扶持を稼ぐために私達に構ってあげる時間がない。

私達が満足するまで教えてくれる場所は学校にしかなかった。

私が行きたいのは弓など隠密行動を主とするレンジャー育成学校。

ここはレンジャーの登竜門と呼ばれるほど徹底的に教える学校。

ここを出れば私の夢へまた一つ近づく。

けれど問題が一つ。

学校に通えるのは一部を除いて市民以上の称号を持つ者のみ。

残念ながら私達は市民じゃないので学校に通えないわ。

もしかしたらユウキなら何とかしてくれる。

一瞬その思考が頭によぎったけどすぐに打ち消したわ。

おそらく皆もユウキに頼むという選択肢についてはあったのかもしれないけど、誰も言い出さないでしょうね。

何せユウキには非常にお世話になっているわ。

私達四人を養うために毎日ポジションを作り、暇を持て余した私達に武器や防具、そして戦い方まで教えてくれる。

そして最も凄いのが、それらのことに関してユウキは全く文句を言わずに平然としていることよ。

私ならユウキの様な対応は無理だと断言できるわ。

「まさかこれは」

「そう、アイラの想像通り、俺達の家だ」

……もしかして私はとんでもない人物に出会ったのかもしれない。

ユウキは買った屋敷の前で得意げにしているけど、普通の常識で考えて十二歳の子供が家を持つことなんてあり得ないのよ。

今更ながらにあの時の選択について考えると寒気がするわね。

もし、あの時パンの持ち主に興味を持たなかったら。

金貨を貰って引き下がっていれば少なくとも私は今この場になかった。

全く、匂いすら感じさせずに通り過ぎ去る。

本当にチャンスというものは分からないものね。

あら？ まだ何かあるのかしら。

ユウキが小箱を持ってこちらへ向かってきます。

そしてそれを目の前で開け、入っていた物は。

「そう、これが市民証明書だ」

もう説明は不可能ね。

私が。いえ、私達があんなにも望んでいた物が目の前に出てきたのだから。

本当にユウキは何者なの？

今なら私はユウキが神様だといっても「ああ、やっぱり」と納得

するでしょうね。

そんなユウキは気を良くして屋敷へと向かう。

と、ここでアクシデントが起こったわ。

普段は物静かなクロスが大声でユウキを引き留めたのよ。

ユウキがつんめのもって扱ける様は失礼だけど笑ってしまったわ。

「ふむ、それは本当か？」

普段とは全然違うユウキの気迫に私は生きた心地がなかったわ。

ユウキ、あんな目もできたのね。

まあ、あれだけの力量を持っていればたかが浮浪児ぐらい黙らせるのも訳ないわね。

およそ二十分の間ずっと黙っていたけど、私の人生の中でこれほどの威圧を経験したことはなかったわ。

たった一言、「学校に行かない」と言えば良かったのかもしれないけど、それは言えなかった。

目の前のユウキから発する『恐怖』よりも『願望』の方が強かったのよ。

それは皆同じ。

だからこそ、誰も言葉を発さなかったのよ。

「Be ambitious 大志を抱け」

ユウキが呟きました。よく聞き取れませんでした。ユウキは一つの決心をしたようです。私達は息を殺して次の言葉を待ったわ。

「良いだろう」

その瞬間、周りの空気がふっと軽くなったわ。

クロスも「では」と言葉を紡いでいたから、それは錯覚じゃない。

「自分が望むままにやってこい」

ユウキはそう紡いだ後、ふっと微笑みました。

その笑みは遠い記憶の中の顔も知らない両親を彷彿させるような慈愛の表情。

「」「」「あ、ありがとうございます」「」「」

いつの間にか私達は自然と、心から頭を下げていたわ。

よく師匠に弟子が頭を下げる場合があるけど、その時の弟子の心境がようやく理解できたかもしれないわね。

敵わないのよ。

自分のためにこれほど多大な労力と時間を割いてくれる存在がありがたすぎて何も言えない。

だから私はこのままユウキ、いえ、ユウキ様がいなくなるまで頭を下げようと考えていたけど隣のキツカが震えだし、そして突然奇声を上げてユウキ様に突撃し出したわ。

よく見るとユキやクロスも駆け出している。

これは遅れるわけにはいかないわ。

ユウキ様ごめんなさい。

最後のわがままです。

感謝の気持ちを表現させて下さい。

「必ず（ユウキ様のご期待に）応えます」

その後の私達は学園の筆記試験のためにユウキ様自らが字の読み書きについて教えてくれました。

これ以上ユウキ様のお手を煩わせたくないという想いは全員が共通していたようで、あのユキでさえ真面目に勉強していたわ。

その甲斐あってか私達全員が試験に合格。来ティルスの入学式に参加できるようになったわね。

しかし、最難関と呼ばれた王立魔法養成学校にユキが合格できるとは予想できなかったわ。

噂によるとユキが唯一の市民だとか。

いつの間にか私達の仲間に入ってきたことといい、ユウキ様を見つけてきたことといい本当にユキは何者かしら。

「もう準備はできたか？」

ユウキ様が私の荷造りについて心配してお声を掛けてくれました。

私達が通う学校は全寮制で寄宿舎暮らしです。

そのため昨日は全員で下着や制服の素材やらを買いに出かけ、ユウキ様が徹夜で全て仕上げてくれました。

「はい、もう少しです」

私は努めて平静に答えます。

本当はユキのことを考えて全然進んでいないことは口が裂けても言えません。

ああ、そうだ。約束を忘れていたわ。

「申し訳ありませんがユウキ様、少々時間を頂けませんか？」

「そう言ってもそろそろ馬車が来るぞ」

「はい、承知しております。しかし、これから先しばらくキツカ達と会えなくなりますから最後に言葉を交わしたいのです」

「ああ、そういうことか。それなら仕方ないな」

ユウキ様は一つ頷いてこの場を去っていきます。ありがとうございます。
います、ユウキ様。

大急ぎで荷造りを終えた私は集合場所へ向かったわ。

その場所は屋敷の裏側にポツンと生えた木。

「急いで急いでアイラー」

「……遅い」

「転ばないよう気を付けて」

どうやら私が最後のよう、本当に恥ずかしい。

さてと、気を取り直して私は木の前で円陣を組みました。

これから先はしばらく会えない。

だからこそ、最後に皆の心を合わせるために円陣を組もうという提案をしたわ。

ここが第二の人生。

ユウキ様の目となり手となり、そして足となって動くための生活が始まる。

キツカやユキ、そしてクロスの様子を確認すると皆固い意志を瞳に宿していた。

うん、満足。

私だけじゃないみたい。

全員でユウキ様を守り抜く決意が満ち溢れている。

まず始めにキツカから。

「私達は」

「「「「一心同体」」」」

次にユキ。

「……最後まで」

「「「「信じぬく」」」」

クロス。

「後悔は」

「「「「「ありえない」「」「」

最後に私です。

「この命を誰に捧げる」

「「「「「ユウキのために」「」「」

番外編 アイラの視点（後書き）

稚拙な駄文を最後までお読み頂きありがとうございました。

普段の生活（前書き）

大幅変更しました。

普段の生活

14歳になった俺は以前と比べて大分力が付いた様に思える。

身長も伸びたしやれることも増えた。

だが、俺の心は未だにあの時から動こうとしない。

ベッドに寝ていた俺は何となくステータスウィンドウを開いてみる。

名前、装備、スキルなどが並んでいる枠の中に一つだけ空白が存在していた。

「やはりログアウトできないか」

その項目は夢から覚めるための必須場所。

それが無いということは、覚めない夢と同じこと。

覚めない夢＝現実と置き換えることはできると考える。

つまり俺はこの世界は仮想空間でなく、現実ではないのかと疑い始めていた。

いくらゲームが好きな俺とはいえ1年以上ゲームの世界に浸ることなど出来やしない。

精神はともかく体がもたないのだ。

だが、今のところ俺の体に変調はない。

つまり体は元気そのものだということになる。

「この世界は妙に現実感があるんだよな」

ゲームの世界ではありえなかった空腹や病気などの異変。

現実ではありえないステータスウィンドウの出現。

「……胡蝶の夢」

俺は何ともなしに呟く。

胡蝶の夢とは中国の荘子の偉人が思想であり、ここが現実か否かを論ずることよりも蝶なら蝶で、皇帝なら皇帝でその場を精いっぱい生きれば良いということを説いていた。

次に俺は自分のステータスを確認する

名前： ユウキ「カザクラ

装備： 武器 ミスリルダガー

防具 風のマント

頭 ミスリルヘルム

足 軽業師の靴

装飾品 厚手の手袋

お金 54600G

ステータス

剣 35

魔法	20
採取	25
料理	5
鍛冶	45
調合	56
裁縫	43

アイラ達と別れてからもう2年が過ぎ、昔と比べて相当スキルが上がった。

特に鍛冶や調合等はもうそれで食べていけるレベルだ。

「あいつらの学費を稼ぐために相当頑張ったからなあ」

俺は過去を振り返る。

4人が学園に向かった最初の一年は特に忙しかった。

入学金やら学費の支払いやらでお金がどんどん飛んでいく。

必要な金を稼ぎ出すために俺はポーションのほかに武器や防具を作って売っていた。

始めは正体を隠すつもりだったがもうそんなことを言っていられない状況じゃない。

これまで封じていた露天商まで行って金を稼ぎ出さなければならなかった。

幸いにも露天商を行っていた期間で闇の者が絡んでくることは無

くてホッとする。

半年ぐらい続けると俺の作った物は出来が良いと評判が出来て、次第には俺の家まで押しかけて来る冒険者が現れる始末。

商売も軌道に乗ってとりあえずは金の心配はなくなったのが1年前。

今はわざわざ売りに行かなくとも待っていれば客が来る状態だ。

だから俺はボーっとしていて良い

していて良い……はずなんだけど。

「いつまで寝ているのですかこの怠け者が」

罵声とともに俺は文字通りベッドから叩き起こされた。

「さっさと起きなさい。今日の分の仕事は山のようにあるのですよ」

「エルファさん、一応俺は主だよ？」

俺が涙目で抗議するがエルファさんは素知らぬ顔をしてさっさとベッドメイキングに取り掛かっていた。

俺を罵倒するのは最近雇ったメイドさんのエルファ「ララフルだ。

年は17歳前後。きめ細かい白磁の肌と鮮やかな緑色が映えた腰まである長い髪と瞳が印象的な少女。例えるならフランス人形、ただそこに佇んでいても絵になる美しさを秘めていた。

しかし、エルファさんは謎が多すぎる。

名前： エルファ＝ラフル

装備： 武器 アサシンダガー

防具 メイド服

頭 カチューシャ

足 ニーソックス

装飾品 薄手の手袋

ステータス

小剣 85

隠密 69

料理 75

裁縫 56

音楽 65

鑑定 75

「……一体何だこれは？」

顔合わせした際にエルファさんのステータスを見せてもらった感想がこれ。

どれもこれも高レベルだが、いかんせん方向性が色々とおかしい。

隠密ってなんだ？ どうしてそんな特殊スキルがここまでのレベルになっている？

小剣と隠密がここまで高くなるのに思い当たる職種が一つあるが、それはあまり考えたくない。

何故ならそれはアサシ

「主、さっさとして下さい」

エルファの催促に俺をぎくりとしながらも頷く。

まあ、人の過去など詮索しても仕方ないからここは聞かないで
おくのが正しいか。

本人が言いたくなったら話すだろうと俺は考えている。

そのステータスから想像できる通り、食事も掃除も文句の付け
ようはないが、主を主とも思わない言動が玉に傷の、扱い難い困った
人だった。

本人いわく、ちゃんと主らしく振舞えばこちらも誠意ある対応を
取るらしいが、エルファが納得する主の振舞い方とは一体何だろう。

前に聞いてみると。

「人に聞く時点で主失格です」

……一言で切って落とされた。

言っておくが俺にM属性はない、貶されて喜ぶという特殊な性癖
は持っていないぞ。

どうしてエルファさんがここにいるのか。それは2年前に遡る。

俺は4人を見送った後、屋敷が広すぎてとても1人では管理出来ないと悟った俺は誰かを雇うことにした。

そのことをポツリとティータさんに漏らすと「じゃあ良い人を知っているわよ」と人を紹介された。

ティータさんの紹介なら何かと大丈夫だろうと判断した俺はろくに面接もせずに採用した。

しかし、それが運の尽き。

ご存じの通りエルファさんは俺に対して人間扱いしてくれません。

ティータさんは「愛情表現よ」と笑っていましたが、どこの世界に愛情をサドな言動で表現する輩がいますか。

「なにボサツとしているんですか、朝飯が冷めるからさっさと起きてください」

はい、分かりました。すぐに下へ向かいますから毛布でバサバサしないで下さい。

俺は高速で着替えた後、逃げるように下の食堂へ向かった。

食堂には人20人が座れるほど巨大な長テーブルが置かれている。で、入口から見て最も遠い上座の位置に俺の朝食が用意されていた。

パンに牛乳、季節のサラダやベーコンエッグで、デザート付きなど、普通の水準から見れば豪華な部類に入る料理が並んでいた。

俺はまだ湯気を立てているパンを齧ってみる。

パンは出来立てらしく口に含んだ瞬間にほっこりとした。

「うん、美味しい」

食堂は清潔が行き届いており、敷いてあるテーブルクロスも皺一つなかった。

綺麗なことは綺麗だが、アイロンもない時代にどうやって皺を伸ばしているのか。

「失礼します」

その方法について頭を悩ませているとエルファさんが手にある物を抱えて食堂に入ってきた。

「何を聞きますか」

エルファさんはバイオリンを肩に乗せて俺にリクエストしてくる。

「そうだなあ、少し明るい感じで」

「了解しました」

俺の意向を聞いたのか、エルファさんが知っている中で楽しめの

ポップな旋律がバイオリンから響いてくる。

その演奏はとてもアマチュアとは思えないほどレベルが高い。

「しかし、まあ」

俺は演奏に集中しているエルファさんを眺めながら考える。

確かに言動は最悪だが、それを補って余りある程の長所を彼女は有している。

俺がエルファさんをここに置いている理由もそれだ。

料理も美味しく、掃除も行き届いてかつ演奏を楽しめるのであれば多少の言動ぐらいは我慢してやろう。

「次は悲しめの曲で」

そろそろ終わりそうだったので俺は新たなリクエストをエルファさんに注文した。

「師匠、おはようございます」

朝食も食べ終わり、紅茶を飲んでいるとその声と共に食堂に入ってくる人影。

親のお下がりなのか頑丈なつなぎ服に身を纏っている。しかし、それによって美しさが失われることはない容貌を持っているのは。

「ああ、サラか。おはよう」

俺がそう微笑みかけるとサラは恐縮したのかペコリと頭を下げた。

俺より頭一つ分高い身長と大人びた物腰ゆえに見た目20歳実年齢14歳という年齢詐欺を犯しているサラ。キュリアス。親が職人で、幼い頃からの手伝いをしているせいか作業しやすいようにレンガ色のくすんだ髪を肩口で揃えており、体も同年代の女子と比べるとやや筋肉質だった。

「師匠、今日は武器を作るんですね」

目をキラキラさせて尋ねてくるサラに俺は苦笑して肯定する。

サラは俺のことを師匠と呼ぶ。

サラ曰く、鍛冶屋である親の所に、武器の修理に訪れた冒険者がその武器を絶賛していたので、冒険者に頼んで試しにそれを奮ってみると雷にしびれた様な衝撃を受けたそうだ。

あれほどきめ細かい出来栄えなのに実践重視で作られている。形式美と機能美を兼ね備えたあの武器を作ったのは一体誰なのかを知りたくて探った結果、俺の家に辿り着いたらしい。

「師匠、見学しますから」

サラは俺と同レベルの鍛冶職人になりたいそうだ。しかしまた、女性で職人とは厳しい道を選んだものかと感嘆する。

鍛冶職人の中の暗黙のルールとして子供はともかく鍛冶場に女を入れないというのがある。よく分からないがそういう決まりがあるから、彼女が鍛冶職人として生きていくのは厳しいだろうと俺は考えている。

が、ドエスのエルファ曰く、常識無視の塊である主の弟子が職人達から村八分にされるわけがない、例え敵に回したとしても、あんなの腕前なら例え前人未到の場所でも武器を求めて買いに来る客が後を絶たないとえらく捻くれた褒め言葉を頂いた。

俺から言わせるとエルファさんの方が常識無視なんだけど。

小剣レベル85って一体何？

閑話休題

実際問題として職人達から嫌われたとしても、サラが後悔せずに生きていけるんだったらそれで良い。

そう結論づけて俺はこれ以上考えるのを止めた。

「師匠、何の武器を作るのですか？」

離れの竈に向かって共に歩いているとサラがウキウキした様子で聞いてくる。

「鋼の剣に風属性である『風の石』を付加させてカマイタチを飛ばせる『風の剣』を作ろうと思う」

一般的に武器は鍛冶屋によって性能が若干異なるが、それでも俺の域までには及ばないだろう。鍛冶レベルが低かった頃にも同じ材料で重さや切れ味が数段上なのをいくつも作っていたが、鍛冶レベルが20を超えると俺は本格的に独自路線を歩み始めた。

簡潔に言つと武器に属性を付与。

常に高熱を発する槍や帯電している斧などを作つて売っていた

俺の武器は既存の概念をひっくり返すほどの衝撃を与えたらしく、鍛冶職人の間では俺のことを鍛冶職人の始祖であるメテルギウスの生まれ変わりと持て囃された。

まあ、呼び方なんてどうでもいいので、俺のことをなんて呼ぶかは自由に任せている。

とにかく、俺は武器に属性を組み込める唯一の鍛冶職人として評判を得ていた。

そう、俺は武器に属性を付与させるといふ困難な技術を習得している。

経験がある今でこそ簡単に出来るが、ログアウトが可能なプレイヤーの時は難しかった。

属性付与は豪快な腕力と繊細な技術の2つが必須である。

その相反するものを両立させるにはどれだけ困難か。

繰り返される失敗に心が折れかけたことは一度や二度でない。

さらに付与させる属性を増やすとさらに難易度が上がる。

『火』『水』『風』『雷』『土』『闇』『光』7種類全ての属性付与ができたときは冗談抜きで死んでもいいと思った。

鍛冶に関しては俺と肩を並べるプレイヤーはいなかった。

つまりすごいわけ。

だから、そう。

「師匠、1つの属性付与なんて言わずにもう2、3個属性を付け加えましょう。私は『風』と『雷』を付け加えた『風雷の剣』を作れますから」

出会ってから一年にも満たないのにここまで出来るのは天才を通り越して異常だぞ。

サラ曰く、師匠のやり口を真似ているだけですからすぐに覚えられたのであって、もし独学なら1つの属性付与さえ無理ですよ。と言っているが鍛冶は見えて出来るものでなく、経験が重要なものだから、やはりサラは天性の何かを持っている。

だってステータスが。

名前： サラⅡキュリアス

装備：

武器 なし

防具 丈夫なツナギ

頭 なし

足 火モグラのブーツ

装飾品 力の指輪

ステータス

鍛冶 105

そのステータスを見たとき俺は目を疑ったよ。

ハンマーすら握ったこともないサラが鍛冶レベル3桁。

しかもそれ以外は全く使えない。

難しい剣の製造方法は一発で理解できる癖に、本を読むとなると
どれだけ優しくとも3行で眠ってしまう。

エルファさんとは別の意味で驚いた。

「それもいいが生憎と材料がない。だから今日はこれで我慢してほしい」

「えー、何で材料が無いんですか？」

「キツ力達の試験が近いからな素材を取りに行く余裕がないんだ」

最初の1年はともかく、2年目に入るとキツ力達も学校に慣れてきたのか4人は冒険に出かけて魔物を倒し、その際のドロップアイ

テムを俺に届けるようになってきた。

俺としては素材が格安で手に入り、キツ力達は小遣い稼ぎそして学費返済と双方ともに利益があるので結構長い間続いている。

「一応キツ力達の名誉のために言っておくが、この風の石は市場に出回らない非売品だぞ」

一般に流通しているのを市販品なら、闇市や冒険者から直接買わないと手に入らない素材が非売品である。

で、属性付与させるための素材の大半が非売品だからキツ力達の存在がどれだけありがたいか。

いやいや、本当にキツ力達を拾って良かったと思う。

「はい、わかりました」

俺の言っていることが通じたのか、しぶしぶながらも引き下がってくれるサラ。

もっと強くなりたいという向上心は称賛に値するが、感情をストレートに出すことをもう少し抑えてくれないものだろうか。

まあ、そのところは壁にぶつかれば改善するかと思っている。やはり人間には挫折というのが必要だということかな。

そして俺は頭を切り替えて原材料の鉄鉱石と風の石を手元に並べる。

どのように配分すれば出来上がりの剣に風を付与できるのか、俺はゲーム内での記憶にある精製法を引っ張り上げた。

「うん。よし、これでいくか」

頭の中で一通りまとまった俺はハンマーを持つ。

「サラも近くで見ておけよ。こういうのは基礎だから反復させても損はない」

サラが頷き、真剣に見ているのを気配で感じた俺は灼熱に溶けた鉄鉱石を打った。

カーンっ！　　と、小気味の良い音が辺りに響いた。

武器の生成は一日に一本。

今回は単純に一属性だけ付与するので二時間あれば完成するが、もし全ての属性を付与するとなれば今日だけでは間に合わない。少なくとも明日までかかる。

サラの体力上まだうっちは厳しいだろう、となればそこがサラにとつては壁になるかな。

俺はそんなことを考えながら、完成したばかりの『風の剣』を振ってみる。

軽く振ったつもりだったのだが、発生したカマイタチは一般の魔術師が放つウィンドと同威力だった。

「ほら、振ってみろ」

サラが試し切りしたそうだったので渡す。

「さすが師匠、私が作ったのと比べても段違いに強いし軽いです」
するとサラは大喜びでカマイタチをあちこちに放った。

サラの実家は鍛冶屋のためたまに俺から材料を貰って作ることがある。完成品を俺に見せてくれるのだが、いかんせんまだ俺の領域にまで達していないとみる。

「まだまだサラには負けないつもりだ」

サラが放つかマイタチを避けながら俺はそう言い放つ。

「さすが師匠です。これだから越えがいがあります」

剣を俺に返しながらサラは喜色と闘志を混ぜ合わせた感情を瞳に浮かべてニツコリと笑った。

「完成しましたか、そろそろ昼食ができますのでそれまでに汗を落としてください」

レディーファースト。だからまず始めにサラを水場へ行かせる。

サラは「師匠より先に入るなんてとんでもない」とよく分からない所で恐縮していたが、俺が入るよう命令すると従ってくれた。

俺に対する敬意を持っているのは構わないけど、その使う場面が間違っているのではないかと考える。師匠の言葉に嫌な顔を浮かべて「えー」は無いだらう。

そんなことを考えているとサラが上がったらしく、次に俺が入る。

屋敷の一角に備え付けてある水道は特別製で、常にお湯が出るよう改造されている。この発明はエルファも嬉しかったらしく「たまには良いことしますね」と呟いてくれたのが印象に残っていた。

「サラ、先程の工程は覚えているか？ 昼食を食べた後はサラが同じのを作るんだぞ」

「はい、バッチリです。師匠の作品を超えた逸品を作り上げてみせます！」

その意気込みは素晴らしいが、空回りしないようにな。何せ後始末は俺がしなくちゃなんないから。

エルファさんが昼食を用意している間に俺は午後の予定を確認する。

「エルファさん、ティータさんから頼まれごとか何か無かった？」

「そろそろポジションが切れそうですので納品してほしいとか」

パスタとスープを乗せた盆を運びながらそう受け答えるエルファさん。

「うん、分かった。サラの鍛冶が終わり次第ポジション作成に取り

掛かるから準備をよろしく」

「畏まりました」

エルファさんはそう述べた後、定位置に座ってバイオリンを響かせ始めた。

慈善事業

「そろそろかな」

「その通りかと」

来客室に備え付けられている椅子に腰かけていた俺の呟きに控えていたエルファさんが答える。

サラはいない。

と、いうのも昨日に「明日は修行なしだから実家で自己練習しろ」と言い含めていたから来るはずがないだろう。

「主、お客様です」

「本当に、よく分かるな」

エルファさんは気配を感じ取れる性質らしく、呼び鈴が鳴らなくとも来客が訪れることを察知できた。

「さてと、お迎えいたします」

エルファさんは音もなく歩いて玄関に向かった。

派手な装飾が好かない俺は屋敷のそれを必要最低限に抑えている。

簡潔に言っなら揃えるのがめんどくさかっただけ。

だから生活必需品以外の家具はろくに買い足さなかった。

が、エルファさんはそれが嫌だったようだ。

お金がない時は自制していたみたいたが、余裕が出てきても装飾品に金をかけなかった俺に業を煮やしたのかエルファさんは俺の許可なしに絵画や美術品を購入した。

その際に一悶着あったのだが、ティータさんがエルファの擁護に回ったため俺が悪いということになった。

「ボクは他人の目というのをもう少し気にした方がいいわよ。ここに来る人の相手をしているエルファの心情をくみ取りなさい」

と、逆に説教されてしまった。

で、そこから反省した俺はとりあえず来客室くらいは見られるようにしようと頑張った。

そして、頑張った結果が。

「こんにちは、素晴らしい部屋ですね。金で出来た彫刻にプラチナの甲冑。まるで王宮にいるみたいです」

来客室に訪れる人が異口同音にそんなことを漏らすようになってしまった。

「やりすぎです。掃除する身にもなってください」

そんな陰口を叩かれた覚えがある。

「お褒めいただき光栄ですヒュエテルさん」

目の前の人物はヒュエテル「クーラー」。

俺が設立し、援助している孤児院の園長で、保母さんという表現がピッタリくる人だった。

年は40を超えているので小太りだがそれが愛嬌として出ている。全てを優しく包んでくれそうな雰囲気を持つ人物だった。いつもニコニコと微笑んでいるのは母性からくるものなのだろう。そして、この笑顔こそがささくれた孤児を癒してくれていた。

「ユウキ様のご尽力によって多くの孤児が悪の道に走らずに済みました。このことは感謝に堪えません」

そう言ってヒュエテルさんは頭を下げる。

金に余裕が出てきた俺はあのスラム街を何とかしようと思案していた。

キツカ達が何かをやらかしたので、俺は靴や服を作ってはスラム街に届けていたのだがスラムの環境が酷いこと酷いこと。

暴力や無関心が横行し、路上で人が死に、悪臭が漂っていることが日常の光景としてそこにあった。

そして、何よりも一番衝撃を受けたのは俺やキツカと同年代の子

が盗みや暴行を働いているのを目撃したことだ。

「仕方ないわよ、ああしなければ生きられないんだから」

キツ力が慰めてくれたが、平和な日本で暮らしていた俺には衝撃が大きすぎる。

この現状を何とかしたい。

と、言っても後数年で滅びる都市なので腰を落착けてやることはできない。

さんざん悩んだ末に出た答えが未来ある子供たちだけでも救おうということだった。

だから俺は小規模ながらスラム街を何とかしようとたまに炊き出しを行っているヒュエテルさんと接触し、彼女に孤児院の管理を任せた。

「いえいえ、僕のやっていることはお金を渡すことだけですから、実際に活動しているヒュエテルさんには敵いません。むしろ私が頭を下げるくらいです」

始めはヒュエテルさん1人とおんぼろ建築一戸なので、10人も世話できなかったが、次第にヒュエテルさんの心情に共感してくれる人が現れ始め、さらに孤児達のリーダー格の人が協力してくれたので、今では4ケタに迫る孤児達を保護できている。

そのことが可能になったのはヒュエテルさんが孤児を救うために奮闘し、職員の増加や建物の増築など孤児院に関する責任を一手に

引き受けてくれていたからなので、俺としては頭が上がらない。

目の前のヒュエテルさんは笑顔だが、その裏に壮絶な戦いがあったのだと想像すると本当に申し訳なくなる。

「ご謙遜を、資金がなければ何も始まりませんでした」

そう言って貰えるのはありがたいが、俺は資金を渡したただけなので大した活動はしていない。

「いえいえ、私でなくとも他の人が援助したかもしれません」

「ユウキ様ほど多額の、そして安定して援助してくださる方は他にいませんよ」

属性付与させた武器と言うのは相当高値で売れる。何せそれを製造できるのはこの世界でも数えられるほどで、さらに俺以上の品質を作る職人がいないからその値段を具体的に言つと風の剣一振りあれば大人10人が1年遊んで暮らせるほどだ。

その金を資金として流していたから、普通の孤児院よりも数段立派なモノができるのは道理。

下手すれば貧乏な市民よりも豪華な生活を孤児達は送っていた。

「ヒュエテル様、そろそろ本題に入りませんか」

ちょうど良いタイミングで紅茶と菓子を運んできたエルファさんが次を促す。

傍目から見るとエルファさんの態度は無礼かもしれないが、これがエルファさんなのでお互い何も言わない。

そして、ヒュエテルさんは居住まいを正すと徐に切り出した。

「ユウキ様のご尽力によってスラム街に巢食う孤児はほぼ一掃されました。孤児達も施設での生活に戸惑っていましたが、現在は落ち着いています」

「それは良かった。スラム街の治安も良くなったんじゃないかな」

俺の問いにヒュエテルさんは頷く。彼女曰く、まだ暴力は残っているものの１年前と比べると大分ましになってきたそうだ。

「で、私としては次の段階に進めたいと思います」

「次の段階？」

俺が聞き返すとヒュエテルさんはゴクリと唾を飲み込み、意を決して話し始めた。

「スラム街の大改造を行いたいと思います。具体的に申しますと給金を彼らに払い、彼ら自身の手でスラム街を解体させるのです」

「……なるほどねえ」

ヒュエテルさんの提案に俺は考え込む。

スラム街に集う連中が全員悪の道に走るわけではない。中にはやむに已まれず故郷を捨ててそこに落ちぶれた人間もいる。

そして、彼らを更生させるに一番手っ取り早い方法は職を持たせること。

もちろんそう上手くいくとは限らないが、それでもあそこで腐らせるよりかはずっと建設的だろう。

が、ここで問題が出てくる。

それはこの都市があと3年ほどで滅びるということ。

つまりそんな大規模政策を行ったとしても効果が出る前に終わってしまう可能性が十分にある。

もしそうなると金をどぶに捨てるのみならず、何よりもヒュエテルさんの願いを踏み躪る結果になりかねない。

「……僕的には孤児院に常勤教師を招き、孤児達全員に高等教育を施したいのですが」

そこから離れられない住居と違って人なら移動できる。彼らがどこに行っても生きていられるよう訓練するのなら俺は金を出すと提案するが。

「しかし、私はスラムを何とかしたいのです」

「おそらく3年後には全てが消えますよ」

「万が一そうなるかもしれませんが」

「……信じてほしいのですが」

実はこれまで何度も近いうちに国が滅びると訴えているのだが、誰も彼もが信じてくれなく、拳句の果てには胡散臭い人間が寄つてきて寄付を迫ってくる始末。

「なら、こうはとうですか？ その大規模工事は3年後に行うと、それまでの期間は区画整理や住民の説得などを行うというのは」

「それなら納得です」

信じてもらえないのであれば妥協案を提示しよう。

どうせヒュエテルさんの構想は一朝一夕で出来るものではない。行うにしてもここまで大規模になると国の許可が必要だろう。そして何よりも大金が必要なのでこの提案には頷いてくれた。

「では、積立金として毎月これくらいはどうでしょうか」

「そつだなあ……」

ヒュエテルさんが予め試算してあった金額を見て俺達はこのことで少々議論し合った。

「さて、ではそれまでの間、僕としては孤児達に高等教育を施すために教師を招きたいのですが、伝手はありますか」

「ボランティアの内数人が私塾の講師を行っています。あの人達に

声をかければ了承してくれるかもしれません」

「それは良かった、早速お願いします。で、給金の方は一般学校の教師より1割増しだということを打診して下さい」

「分かりました。しかし、給金1割増しという公表はまだ控えます」

「どういうことですか？」

俺が聞き返すとヒュエテルさんは少し笑って。

「そのことを示すと単にお金に惹かれた輩が集まりかねません。それはなるべく排除したいので、まずはその事実を伏せておきます」

ヒュエテルさんは孤児院の経営も兼ねていたので金勘定の力量が大いについていた。おかげで巷では『金庫番』という2つ名までつけられている。

俺としてはそこまで徹底的にやってもらうつもりはなかったのだが、ヒュエテルさんは貰うだけでは申し訳ないと言っている。

まあ、払う分が減るに越したことはないけど。

その後、孤児院の現状や備品の過不足など細かい協議を終えたヒュエテルさんは席を立ち、俺は玄関まで見送る。

ヒュエテルさんが来訪したのはまだ日が高いうちだったのだが、いつの間に完全に帳が下りている。

「実りの良い会合ができました。私達にここまで目をかけてくださり本当にありがとうございます」

と、礼を残して屋敷から立ち去っていった。

「変わっていますね」

2人きりになるとエルファさんはそんなことを切り出し始める。

「普通孤児なんて見捨ておかれる存在ですよ。ですから国も知らぬ振りをするにも関わらず主は彼らを救おうとするのですね」

エルファさんの問いに俺は背伸びをしながら頷く。

「これは俺の心によるものだ。俺のいた国では見捨てられる命なんてなかった。だからこの現状を見ると何とかしたくなるんだよ」

理屈ではない。

ただの感情であり、自己満足だということは己が一番身に染みて分かっている。

「しかし、今のところは問題がありませんので目を瞑ることにします。ただし、やりすぎには注意して下さい。いくら手を差し伸べたいとしてもそれで主が潰れるようでは本末転倒です」

「ああ、そこは分かっているよ」

「本気で危なそうでしたら私が無理やりにも止めさせますから」

エルファさんなりの忠告なのだろう。俺はそれに大きく頷いた。

「さて、そろそろ夕餉ですので主は少々お待ちください」

エルファさんは1つ完璧な礼をして屋敷の厨房へと歩を進めていった。

浅はかな考え

「さて、次はどうしようか」

夕食を食べながらそんなことを呟く。

「師匠、決まっているでしょう！ 私にみっちりと教えることですよ！」

「……本当に元気だな、サラ」

俺はげんなりした眼でサラを見つめるが、サラは俺の感情などどこ吹く風でフフンとばかりに胸を張る。

「当たり前です。何故なら始めて5つの属性を付与させた武器の製造を目の当たりにしたのです。これが興奮せずにいられますか！」

そう、俺はつい先程まで7属性の内光と闇を除いた5属性を付与させた武器を製造していた。

簡単に見えるが実際は言語で語り尽せないほど難しい。

何せ火と水、雷と土と言ったように属性の相性というものがあるために各属性を相殺させないよう絶妙なバランス感覚が必要になる。

で、どうしてそんな俺は作ったのかというと、そろそろサラに壁というものを経験させるためだった。

最近サラは天狗になってきたのか遠慮もせずに多くの属性を付与

させた武器を作ってほしいと催促し、それがあまりにしつこいと感じた俺は不可能な課題を出してやった。

サラの力量ではせいぜい3つの属性を付与させるレベル。

おそらく成功しないだろう。

が、不安というものもある。

何せサラは天才だ、凡人たる俺の思惑など易々と裏切ってしまう展開が頭から離れない。

「……まあ、それでもいいか」

俺を追い抜く風景が一瞬頭をよぎったが、俺はそれを認めることにする。

その時は7つの属性全部付与させた武器でも作らせれば問題はないだろう。

閑話休題

「で、とりあえず今日は飯食ったら寝る。今日は親に連絡しているだろうから問題ない」

早朝から製造を始め、完成したのがつい1時間ほど前。その間は気を抜くことが許されず、つきつきりで打っていたため、身体も精神も疲労がヤバイ。今すぐにでも倒れたい気分だ。

「むー、師匠。つれないですねえ。ちょっとぐらい先程の鍛冶につ

いて教えて下さいよ」

「頬をふくらませて剥れて俺を萌え殺させるつもりか？」

「師匠？ 何を言っているんですか？」

「……忘れてくれ」

どうも疲労によって思考能力が変になっている、俺は何て戯言を口走ってしまったのだろう。

「明日だ、明日サラに同じものを作ってもらうから今日はよく寝ておけ」

「しかし、私は興奮で眠気など起きないのですが」

「そうなのか？」

「はい、今にでもそこら辺を笑いながら走りたい衝動に駆られています」

どうやらサラは疲労が一線を越えるとテンションがハイになるらしい、新たな発見に俺は何となく頷く。

が、そんなことをしている場合ではないので俺は課題を出すことにする。

「それなら宿題だ。今、エルファがベットを整えているからそれが終わり次第そこで5分近くじっとしていること」

「嫌ですよ、私は眠る気分じゃないんです」

サラがそう言ってごねるので俺は新たな言葉を紡いだ。

「5分間ベッドで横になっていれば今すぐ5つの属性を付与させた武器を作っても良いぞ」

「分かりました、約束は守って下さいね！」

サラはそれを聞くやいなや2階の寝室へすっ飛んで行った。

20分後

「御馳走様」

「御粗末様です」

エルファさん曰く、サラはベッドに入っしばらくは目がギンギンに冴えていたようだが、突然スイッチが入ったかの様に眠りに入ったようだ。

あまりに予想通な展開に俺は苦笑するしかない。

「さて、俺も寝させてもらっぞ、戸締りは任せる」

欠伸を一つした俺は食堂を出ていった。

鍛冶場には俺とサラの2人しかいないが、その場は和気藹藹とした雰囲気ではなく悲壮感に充ち溢れていた。

「サラ。もう分かっただろ、今のお前には無理だ」

もう何回言っただろう、数えることすら億劫になる程繰り返した台詞を紡ぐのだが。

「もう一度だけ、もう一度だけチャンスをお願いします」

サラは付与に失敗し、跡形もなくなった剣を握りしめながら涙ながらに訴えた。

始めは驕り気味のサラに灸を据えるつもりで今回の提案を出したのだが、ハッキリ言って今は後悔している。

てつきり俺はあまりの難しさに諦めて素直に俺の教えを請うと予想していたのだが、まさかサラは困難にぶち当たるとボロボロになるまで挑戦するタイプだとは知らなかった。

「師匠命令だ、明日にでもやれ」

俺は溜息を吐くとサラにそう中止を命令する。

無論サラは抵抗したのだが、すでにハンマーすら握れないほど手がボロボロになっていることを指摘すると不承不承ながらも頷く。

「また明日やりますから」

去り際にその言葉を残していったのが印象的だった。

2、3の属性を付与させるにはともかく、4つ以上になると相反する属性を同居させるために一般の鍛冶屋には置いていない特殊かつ巨大な設備が必要なので俺の鍛冶場は一辺10mという広さを持つていた。

そこにポツンと一人残された俺は先程までサラが打っていた失敗作を拾い上げる。

それは付与された属性同士が反発して無残な形となった剣だが、前のと比べると僅かにだが出来が良い。この調子だといずれかは成功するだろうと思われる出来だった、が。

「その前にサラが壊れそうだな」

悲しいかな、今のサラは才能に肉体が追い付いていない。

この調子だとサラに致命的な何かが起こってしまうことは十分に予想できた。

一応俺はサラの師匠なので、弟子であるサラの面倒を見なければならぬ。

で、サラがこのままだと不幸な結果が待ち受けているのならやることは一つだ。

「俺はサラにしばらくここに来ると言わなければならない」

突然の禁止にサラは混乱するだろうし、もしかすると勝手に鍛冶

場へと侵入するかもしれない。

「言い訳かもしれないが鍛冶自体を禁止するわけじゃないぞ」

サラの身が危険なのはあくまで4つ以上属性を付与させることで2、3の属性付与させた武器の生成を禁止しているわけではない。

そして、4つ以上は俺の鍛冶場のような設備が無いと無理であり、この設備が置いてあるのは王宮公認の鍛冶屋が研究施設のみだろう。

「まあ、何を囁ろうともこれは俺の浅はかな行為が招いた結果に変わりはないけどな」

全ては俺が5つの属性を付与させた武器をサラに作らせたことにある。

身を切り刻まれる悔恨に顔を歪めながら俺は自嘲した。

「今日で4日目ですね」

エルファさんの言葉に椅子に座っている俺はゆっくりと頷く。

俺はサラに療養を言い渡そうと表情を硬くして待ち構えていたのだが、サラはあの日以来一向に姿を見せていなかった。

自宅へ帰って頭を冷やし、今の自分では完成できないと自覚して体を休めているのなら好ましいが、おそらくそうではない。

あのサラの性格上自らの意志でここに来ることを止めることはありえない。

十中八九サラの容体を重く見た両親が止めたのだろう。

「迎えに行くのですか」

エルファさんの問いに俺は応える。

サラは未熟だが、いずれは世界最高の鍛冶師になる可能性を持つ逸材。

休養させるならまだしも、二度と鍛冶に触れさせないとされたら俺は悔やんでも悔やみきれない。

「馬車を用意してくれ」

俺の要望にエルファさんは「畏まりました」と礼をしてこの場を去っていった。

逢引き（前書き）

サラの話は次で終わりです。

やれやれ、本来なら1話で終わらせる予定だったのに……

逢引き

世界最高峰の鍛冶職人という名は伊達でない。

高名な冒険者も大富豪も俺の武器を求めに来るため俺はあまり外へ出られないし、所用があつて外出するにしてもこの馬車のように外から中の様子が伺えない様カーテンで外部と遮断されていた。

「まあ、有名税といったところか」

俺はフフンと鼻で笑うことにする。

と、いつか笑うしかない。一体何が悲しくて屋敷の外から出られない実質軟禁生活を送らなければならないのか自問してしまつたため、ここは優越感に浸っておくことにしている。

「が、今はそんなことを考えている場合でない」

ダークサイドに陥るのは後でいい、今はもっと大事なことがある。

灯りがランプしかない中で俺は帽子やマフラーなどで顔を隠して準備をした。

エルファさん曰く、サラの実家は中堅どころの鍛冶屋らしくそれほど人気があるわけではないにしろ、それでも客はいるので変装しておいた方が良くとアドバイスをされたから。

正直な話、この程度で騙せるかなと不安だったのだがエルファさんは。

「経験上、人なんて顔さえ隠せば大概何とかなるようなものです」

と、非常に説得力がある言葉を紡がれたため俺は観念して従った。

変装を終えた俺は腕を組んでこれから起こることを予想してみる。

サラからの情報によると、自分は一人娘で他に子供はいないことからサラの両親はサラを目に入れても痛くないくらい溺愛しているだろう。

そして俺はその愛娘に無理をさせてしまった。

サラの両親の怒りは相当なものだろうと予測できる。

「今日はサラ本人に会うことは出来そうにないな」

アポもなしに突然訪れたのだから当然として、多分な親の怒りをぶつけられることは覚悟しておかねばならない。

「まあ、それは俺の所業に対する罰として受け止めればいいか」

重要なことは如何にこちらの誠意を相手に分からせるかだ。

確かに今回俺はサラを傷つけたが、それはサラの才能が大きすぎたから。嫉妬の感情も交じっていたと正直に述べよう。その上でサラの素直さを褒め称えれば両親も理解してくれるだろう。

「よし、これでいい」

俺が頷くと同時に振動が大きくなったのは、石畳が敷き詰められている地区に変わったからだろう。

「ご到着しました」

その言葉と同時に業者は恭しく扉を開ける。

その通りはティータさんが薬屋を営んでいる地区と比べるとやや活気が劣るものの、その場所に漂う空気は実戦向きというか緊張感が溢れている。

そこを歩きかう人を眺めても、油断ない雰囲気を漂わせていることから熟練の冒険者達だということが分かった。

古びた石畳を通り抜け、少し奥まった場所にある年季の入った店の前で俺は立ち止まる。

『キュリアス鍛冶屋』

ここが俺を師匠と呼ぶサラハキュリアスの実家とみて間違いなかった。

「さて、入るとするか」

俺は己に発破をかけ、唾を飲み込んでから中へ入った。

入って2歩も歩かないうちにカウンターがあり、武器が壁に所狭しと並べられている。

少々狭いのではないかと感じたが奥から鉄を打っている音が響いてくることから売り場と鍛冶場、そして住居区がこの場所に詰め込まれているのだろうと考えると納得できた。

「あら、いらっしやい旅人さん。今日はどのような依頼で」

そう店内を見回しているうちに奥から40代半ばの物腰の良い年配の女性が出てきた。

よく見ると目の辺りとかサラの面影が見えるのでサラの母親ではないのかと推測する。

「あら、どうしましたか？ 何か私の顔についていますか」

頬を撫でながらそう聞いてきたので俺は首を振った。

俺は気付かなかったが、長い間彼女を見つめていたのだろう。そこは反省せねば。

と、まあそこら辺は置いて俺は本題を切り出す。

「サラの師匠、ユウキ」カザクラが参ったと伝えてください」

俺がそう述べると、サラの母親はビシリと硬直した。

「……」

これ以上言葉を重ねても意味がないだろうと判断し、俺は口を紡いで相手の判断を待つ。

1分、2分とお互い沈黙を保ったまま時間が過ぎる。

「主人を呼んできます」

サラの母親は辛うじてそう告げるとそそくさとその場を後にした。

で、残された俺は扉にもたれかかって相手が出てくるまで待つことにした。

この間は非常に長く感じられる。緊張してのどが渇き、気持ちが悪く落ち着かないので視線をあちこちに彷徨わせて気分を紛らわせる。一瞬外に出ようかと頭に過ったが、ここでそんなことをしてしまうと二度と来れないという確信があった。

そんな風に自問していると、奥からの音が止んで誰かがこちらに向かってくる足音が聞こえてきた。

「ここからが本番か」

俺は唇を舌で湿らせながらそう呟いた。

世の中には不条理というものが存在する。

こちらがいくら友好を訴えようと、手を取り合っていこうと手を差し出しても相手がその聞く耳を持たなければ意味がないとい

うことだ。

俺は今、その不条理を心の底から味わっている、何せ。

「……問答無用で外に放り出されるとは思わなかったな」

俺は服についた土ぼこりを払いながら毒づく。

あの時、サラの父親が現れたので俺はサラが如何に素晴らしいか、今後このようなことは起きないよう宣誓しようかと口を開いたのだが、言葉が出る前に俺は胸を掴まれて外へと投げられた。

まさかサラの父親がいきなりそんな強硬手段を取ってくるとは思いもしなかったので俺はさしたる抵抗もできず、なすがままに任せしかなかった。

で、俺としてはこのまま終わるわけにはいかなかったので、もう一度中へ入ろうとしたのだが扉は固く閉ざされている。

なるほど、つまり俺と話すつもりは全くないということか。

「せめてサラとお話しさせてください」

俺は扉をガンガンと叩きながら訴えるが返事は全くない。

仕方ない、根勝負と行くか。

俺が叩くのをやめるか向こうが俺を招き入れるのが先かと考えたのだ、が。

「おい、ドアを叩いている少年はもしかするとユウキ」カザクラじゃないか？」

いつの間にか仮面が取れていたらしい。俺は慌てて装着するがすでに後の祭り。

このままだと取り囲まれて身動きが取れなくなると判断した俺は止めてあった馬車に乗ってこの場を後にする。

「……仕方ない、最終手段といくか」

乾いた唇を舌でペロリと舐めて俺はそのことの算段を始めた。

夜 この世界には電気というものがなかったため、必然的に明かりはランプなど油を使ったものになる。油は貴重なため、わざわざ街灯にするのは宿場街などよほど人の出入りが多いところだけ。

こんな一角など存在しているはずがないだろう。

明かりは外から漏れてくる光と月と星の光のみなので夜中遅くなると安全のため家に泊まらせた理由もこの暗さなら納得のいくものだ。

こんな場所で襲われたらおそらく完全犯罪が成立してしまうだろう。

「今はこの暗さがありがたいな」

で、俺はといえばその闇夜に紛れてサラのいるであろう2階の部屋のベランダによじ登っている。

フェザーブーツを使って己の体重が軽くなったとはいえ、この代物は空を飛べるわけではないので俺はフック付きロープを併用していたわけだ。

「これで見つかったら言い訳できないな」

俺のやっていることはどこから見ても犯罪者、弁明など期待できないだろう。

「さて、エルファさんからの情報によると今がサラは一人の時間帯だな」

一体どこで調べたのか、エルファさんはキュリアス家の部屋配置はおろか全員のスケジュールまで割り出していた。

「これぐらい造作ありません」

素でそんなことを言っただけのエルファさんにドン引きした俺を責められるものはいないだろう。

閑話休題

俺は一つ咳払いすると窓をコンコンとノックする。

「誰ですか？」

しばらくするとやや緊張気味ながらも返事してくれた。

今は少し張りが無いが、その声はサラだろう。サラの両親でなくてホッとする。

「サラ、俺だ」

近所迷惑にならない程度でそう囁くと、突然カーテンを引かれ、窓を開けられた。

「師匠？ どうしたんですかこんな時間に！？」

サラは突然現れた俺に混乱しているのだろう、目を丸くしている。

「シーっ！ それを含めて説明する。だから中に入れてくれ」

俺の要望にサラは頷き、俺を中へ招き入れた。

「ありがとう、おかげで助かった」

サラの部屋に潜り込んだ俺はサラに一礼。もしあそこで叫ばれでもすれば俺は決死の逃避行を演ずる羽目になっていた。

で、サラの部屋を見渡した印象が。

「……独特の部屋だな」

俺は苦笑いするしかない。

俺の偏見かもしれないが、普通女の子の部屋というものは人形や服など可愛い物が置いてあるものだと考えている。

しかし、サラの部屋は。

「どうですか？ このブラックアックス！ これは師匠ほどではありませんが、有名なギルロティィイエスマンが闇属性を付与させた逸品です。さらにこのアイスランスは……」

部屋の壁一面に飾られているのは武器。

それもほとんどが属性付きという高価な物ばかりだ。

サラの両親の身なりや店の規模からあまり繁盛しているとは思えないので一体これらの武器を買うお金はどこから出てきたのだろう。

「ああ、これは私が生成した武器と交換したんですよ。私はこの都市でナンバー2を自負していますから。あ、もちろん一位は師匠ですよ？」

どうやらサラは商品として販売できるほどの技術を身に付けていたらしい。俺は誇らしい反面寂しい気持ちになる。

「で、師匠は何故来たのですか？」

そんなことを考えているとサラはそんな質問をしてきたので俺は咳払いを一つして口を開く。

「今日の昼ごろに尋ねたのだがそれは知らないか」

その答えに首を傾げる様子からサラの両親は俺が来たことを伝えていないようだ。まあ、俺が来たことなんて知っても両親にとって

は面倒が増えるだけだから正しい選択かもな。

「まあいい。俺が来た理由は簡単だ、サラの様子が知りたくてな。あの日から来なくなって心配したぞ」

「アハハ、ありがとうございます」

俺の言葉にサラは唇を綻ばせるもすぐに俯く。どうやら両親との間で何かあったようだ。

「サラ、どうした？ 元気がないぞ」

俺はさらに少し近づいて聞くと、サラはキッと眼を上げて俺を見上げた。

「師匠、私を連れて行ってください」

「は？」

思わず間抜けな声を出してしまった俺を責められる者はいないだろう。が、サラは続けて。

「両親は私に二度と鍛冶に関わらせようとしません。そこらの娘としての人生を歩んでほしいみたいです」

「まあ、両親からすればそれが一番だろうな。誰が子供に好き好んで苦難の道を歩ませるものか」

俺に弟子入りするといい、これら高名な鍛冶師の武器と交換できる腕前といい、サラの行動力と才能は常軌を逸している。

「鍛冶に関わる以上サラはまともな人生など歩めまい。下手すれば想像を絶する不幸が待っているだろうな」

「勝手に決めないでほしいです！ 誰が何と言おうと、地獄が待っているように私はこの道を選びます」

サラは脊髄反射の様に俺に跳びかかって胸ぐらを掴む。

「サラ、詰め寄る相手が違うだろう。俺に食ってかかっても仕方がない」

「ああ、そうでした。ごめんなさい、興奮しまして」

タハハと笑って俺から身を離すサラ。

先程までサラの瞳がすぐそこにあっただので動揺を見せないようポーカーフェイスを保つのに苦労した。

「とりあえず俺は3日後にまた来るからそれまでに答えを決めておけ」

「何ですか？ すぐに行きましょうよ」

そう言って急かすサラを見て俺はため息が漏れる。

「サラ、今のお前は混乱している。突然親から鍛冶を取り上げられ、そして俺が現れたから冷静な判断を下せない状態だ。そんな状態で俺についてきてもサラが苦しむだけだぞ」

俺は窓に手を掛けて外に出る準備を整え、最後にこう言い残した。

「最後にだが俺もサラの両親もお前のことを気遣っている。だからサラが鍛冶を捨てても俺は引きとめたりはしない」

まあ、口ではそう言いつつも本心では3年後の魔物大進行が起くる前にサラを助け出して鍛冶に関わらせるつもりだが。

俺は個人の幸せのためなら才能を腐らせてもいいと唱える善人ではないぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4709w/>

ゲームの世界で第二の人生！？

2011年11月20日00時26分発行